

えびの市埋蔵文化財調査報告書第1集

えびの市遺跡詳細
分布調査報告書

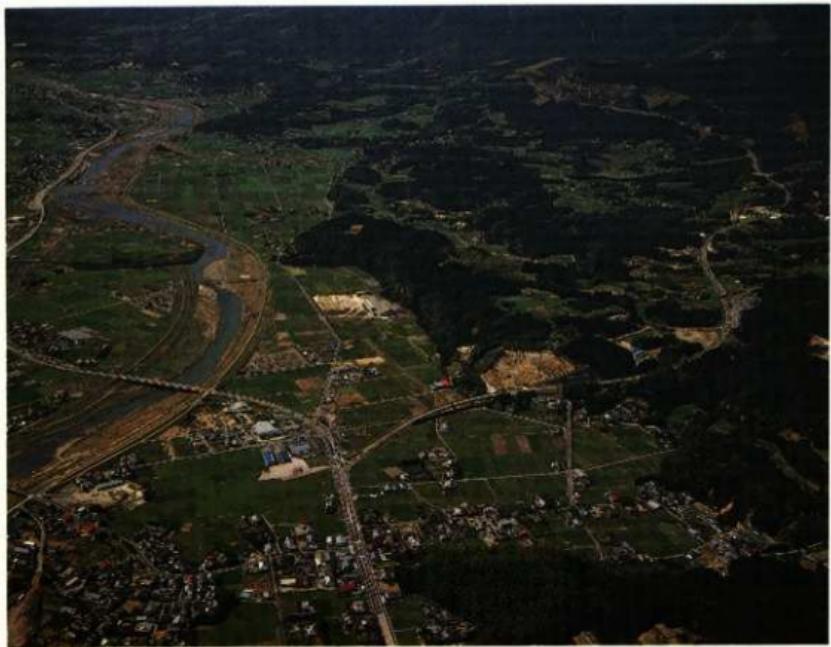
1985

宮崎県えびの市教育委員会

えびの市遺跡詳細
分布調査報告書

1985

宮崎県えびの市教育委員会



えびの市全景

序

えびの市は、宮崎県の最西端に位置し、盆地状の平坦地を中心に、南北の霧島連山と九州山地からなる山すそがおだやかな傾斜の台地を形成しています。この台地上に県指定遺跡「平松古墳」をはじめ、縄文、弥生遺跡、古墳等が数多く散在していることが明らかになつてきました。

近年の九州縦貫自動車道の建設、農業基盤整備に伴う圃場整備等の開発工事は、住みよい生活環境の整備拡充に欠くことのできない事業である反面、先人のこした貴重な文化遺産を絶えず消滅の危機にさらしているのも否めない事実であります。

そのような現状をふまえて、この度、国、県の補助により市が主体となって、遺跡詳細分布調査を実施した次第であります。本調査におきましても数多くの遺跡や遺物を発見するなど、当市における遺跡の分布状況を確認することができ、今後の埋蔵文化財保護対策を立てる上で、貴重な資料を得ることができました。

今後は、それらの成果をもとに、積極的な保護対策を検討し、また展開して行くことになりますが、開発事業を担われる方々や市民の皆様には、当事業の趣旨と成果を充分にご理解いただくと同時に格別のご協力をお願い申しあげるものであります。

この調査にあたり、県教育委員会、調査員の方々をはじめ、市文化財保存調査委員や市民の皆様方のご理解とご協力に対し厚くお礼を申しあげ序といたします。

1986年3月

えびの市教育委員会

教育長 平田 敏正

例　　言

1. 本書は、えびの市教育委員会が昭和60年度に文化庁・県教育委員会の補助を受けて実施した遺跡詳細分布調査の報告書です。
2. 本調査は、埋蔵文化財に関する調査であり、内容は当市全域を対象とする埋蔵文化財包蔵地調査カード及び遺跡分布図の作成であります。
3. 本書の構成は、地理的環境・歴史的環境を述べ、遺跡地名表・主要遺跡概説・遺物実測図・附図の遺跡分布地図から成ります。
4. 本書に掲載された埋蔵文化財は、すべて文化財保護法にいう「周知の埋蔵文化財包蔵地」です。
5. 「周知の埋蔵文化財包蔵地」において、土木工事等を実施しようとする場合には、工事着手の2ヶ月以前に文化庁長官に届け出ることが文化財保護法により義務づけられていますので、「周知の埋蔵文化財包蔵地」およびこれに隣接する地域において土木工事等を実施しようとする場合は、計画段階においてえびの市教育委員会社会教育課（えびの市大字大明司2146-2番地・TEL0984-35-2268）および県教育委員会文化課（宮崎市橋通東1丁目9番10号・TEL0985-24-1111）に連絡し、文化財保護法による協議をされたい。
また、国および地方公共団体等が土木工事等を実施する場合には、七木工事等の通知書を提出することが必要です。
6. なお、埋蔵文化財は、その性質上未発見のまま地中に包蔵されている場合があり、工事等により当該文化財が発見された場合にも前記と同様、えびの市教育委員会社会教育課および県教育委員会文化課に連絡してください。
7. 本書に掲載した地図は、建設省国土地理院長の許可を得た、同院発行の25,000分の1地形図を複製したものです。（承認番号）昭和55年九複第238号

凡 例

- 埋蔵文化財包蔵地（以下「遺跡」）は、地図上に赤色で示した。古墳の場合には一基づつは●で示し、古墳群の場合にはこの範囲を□で示した。また古墳以外の遺跡で範囲の確認、推定できるものは○で示した。
- 地図の「遺跡番号」は、すべて地名表のそれと一致する。
- 「遺跡番号」は、集落跡・散布地・城跡等は一番号とし、古墳群については群に対し一番号を付した。
- 各遺跡を三地区に分け、1000番台は真幸地区、2000番台は加久藤地区、3000番台は飯野地区とした。
- 遺跡名は、原則として小字名にしたがい、一部のものについては、通称、俗称によった。
- 遺跡の所在地は、大字名、小字名で示した。地番については、えびの市教育委員会および県教育委員会文化課へ問い合わせられたい。

7. 調査の組織

調査主体	えびの市教育委員会	
	平田 敏正	教 育 長
	新原 不可止	社会教育課長
	上別府 文夫	社会教育課長補佐
	浜松 政弘	社会教育係長
	川添 総一	派遣社会教育主事
	黒肱 利拡	社会教育主事
	萩原 博幸	社会教育課主事
	前田 誠	社会教育課主事
	吉留 伸也	社会教育課主事（調査担当）

調査員 金子 弘二 宮崎大学教育学部地質学研究室助教授

調査協力 黒木 正人 えびの市文化財保存調査委員
迫田 秀俊 □
竹之内 実 □

調査協力 原田 利盛 えびの市文化財保存調査委員
" 上野 一舉 "
" 木崎原 操 "
" 萩原 勝夫 "
" 屋敷 繁 "
" 安藤 正継 "

調査補助員 下前原 稔

調査指導 長津 宗重 県文化課主任主事

8. 現地における踏査は、吉留、下前原、川添、萩原、前田が行った。
9. 踏査にあたっては、「宮崎県遺跡台帳」等を基礎としたが、県文化財保護審議会委員およびえびの市文化財保存調査委員など地元研究者の長年の調査研究による成果に依拠するところが大であった。
10. 本書の執筆には、「加久藤盆地周辺の地質と地形」を金子弘二助教授に、その他について長津が当り、実測・トレース・拓本については、長津・富永優子・野村涼子・岩見典子が分担して、編集は、長津・吉留がおこなった。

総 目 次

I 総 説

- | | |
|------------------------|---|
| 1. 加久藤盆地周辺の地質と地形 | 1 |
| 2. えびの市の歴史的環境 | 8 |

II 埋蔵文化財包蔵地地名表

11

III 主要遺跡概説

19

IV えびの市関連文献目録

39

附図 えびの市遺跡分布図

挿 図 目 次

第1図 加久藤盆地周辺地質略図	5 ~ 6
第2図 小木原地下式横穴墓群分布図	21~22
第3図 灰塚地下式横穴墓群分布図	23
第4図 地下式横穴墓実測図（I）	24
第5図 地下式横穴墓実測図（II）	25
第6図 地下式横穴墓出土遺物実測図（I）	26
第7図 地下式横穴墓出土遺物実測図（II）	27
第8図 中棚60-1号地下式横穴墓周辺の地形図	30
第9図 中棚60-1号地下式横穴墓実測図	31
第10図 中棚60-1号地下式横穴墓出土遺物実測図	31
第11図 水田原遺跡及び法光寺跡周辺の地形図	32
第12図 水田原遺跡出土遺物実測図	33
第13図 法光寺跡出土遺物実測図（I）	33
第14図 法光寺跡試掘トレンチ実測図	34
第15図 法光寺跡出土遺物実測図（II）	35
第16図 法光寺跡出土遺物実測図（III）	36
第17図 法光寺跡出土遺物実測図（IV）	37
第18図 遺跡詳細分布調査主要遺物実測図	38
第1表 加久藤盆地の地質層序表	4

図 版 目 次

図版 1	打製石鎌（I）（II）	41
図版 2	石匙(中須遺跡)・石庖丁(田原陣遺跡)・短甲(小木原3号地下式横穴墓)	42
図版 3	中棚60-1号地下式横穴墓検出状況・全景	43
図版 4	中棚60-1号地下式横穴墓出土鉄鎌・永田原遺跡全景	44
図版 5	法光寺T-3全景・T-1遺物出土状態	45

I 総 説

1. 加久藤盆地周辺の地質と地形
2. えびの市の歴史的環境

1. 加久藤盆地周辺の地質と地形

宮崎大学教育学部地学教室

金子 弘二

(1)はじめに

加久藤盆地周辺に関連した地質をのべた報文は数多い。そのなかで盆地周辺の地質を総合的に述べたものとして、伊田・本島・安国(1956)の『宮崎県小林市付近天然ガス調査報告』、荒牧(1968)の『加久藤盆地の地質』、長谷・千藤・今西(1972)の『宮崎県加久藤盆地およびその周辺の新生界』等があり、それぞれ研究の成果が詳しくのべられている。当報告文を読まれる方でもっと詳しい記述を必要とされる場合には、古加久藤湖(数万年前の加久藤盆地にあった想像される湖)については伊田・本島・安国(前出)を、古加久藤湖に流入した軽石流の性状については荒牧(前出)を、盆地内の各堆積物についての最新の見解と詳しい記載については長谷・千藤・今西(前出)を参照されたい。

又、えびの市の埋積遺跡に關わる包含層や段丘については遠藤(1979)の『前畠遺跡をとりまく地質的背景』に詳しく述べられている。加久藤盆地の地質図については、この地域を調査した他の研究者との見解の相違があつても、太田・沢村(1971)の『えびの・吉松地区地震震源附近の地質』の付図が全体を概観するのに適している。段丘の分布図は遠藤(前出)が最も詳しい。

(2) 加久藤盆地周辺の各地の地質と地形

～盆地内部～

加久藤盆地は東西14km内外、南北5km内外の盆地であり、川内川が盆地東部で北から流入し(標高約270m)中央部を西に流れ、鹿児島県吉松町とえびの市の境界で南にむきをかけて流出して(標高約215m)いる。この川内川の流路については、後に述べる入戸軽石流が盆地に流入した直後までは現在の流れとは逆に、東方に、即ち小林市方面に排出されていたと柴田(1969)や太田・沢村(前出)が考えたが、長谷・千藤・今西(前出)は明確にこの考えを否定している。これについてはむしろ盆地に北から流入している鉄山川や川内川上流の流路が小林市方面に向かっていたとするほうが検討に値する仮説だと思われる。

盆地内の高位段丘面の標高は東部で300m 西部で280m であるので、現在この盆地は30～

80m以上の深さを持っていることになるが、この盆地の成因については

- ①カルデラ説をとるものに有田（1957）、荒牧（前出）、種子田（1968）、太田・沢村（前出）等があり、
- ②堰止湖説をとるものに伊田・本島・安国（前出）があり、
- ③陥没断層説あるいはそれに近い説をとるものに柴田（前出）、長谷・千藤・今西（前出）等がある。

温泉採取のために盆地内で行ったボーリング・データによれば、盆地底からの深度350m前後で断層崖（カルデラ壁？）の下部を形成する変質した安山岩質岩石〔荒牧（前出）、種子田（前出）の言う変朽安山岩、長谷・千藤・今西（前出）の言う鍋倉相当層〕に到達するが、500mを超えて基盤の四万十層群に到達しない。

地表の地質調査によれば盆地内の堆積物は四～五の部層に分けられている。

これらを加久藤層群と呼んだ伊田・本島・安国（前出）によれば、下位より池牟礼層、昌明寺層、溝園層、下浦層となって居り、とくに最上位の下浦層は東方の小林市を越えて鹿児島湾岸や宮崎平野にまで連続することが述べられている。

この層序は種子田（前出）、柴田（前出）、太田・沢村（前出）にそのまま受け継がれた。また長谷・千藤・今西（前出）も最下位の池牟礼層を切り離して断層崖下部の安山岩質岩石に相当する鍋倉層を含めて“えびの層群”と呼び、従来の昌明寺層については再検討の上で幣田層としているものの、本質的には初めの層序を引き継いだと言つてよい。

これ等に対して、荒牧（前出）は、現在の加久藤盆地の表層部は、古加久藤湖に二回にわたりて流入した軽石流の水中堆積物とそれに関連した堆積物によって占められて居り、古加久藤湖本來の堆積物（加久藤層群）はその厚さが全体で400m以上もあるにも拘らず、その最上部だけが断片的に地表に露出するに過ぎないと述べた。そして、その考えに従つて、従米の池牟礼層～下浦層の四部層を軽石の性状などから二回の軽石流の流入に対応させて再編し、下部を池牟礼層（流入した軽石流の名称は不明）、上部を京町層（流入した軽石流は入戸軽石流）とした。

～東部丘陵地域（シラス台地）～

盆地からの高度差が100m以内の丘陵地であり、入戸軽石流の堆積物（盆地内の下浦層に相当する）と加久藤熔結凝灰岩が構成層となっている。

隣接の盆地から断層崖を介して140mほどそびえ立っている八幡ヶ丘を初めとする幾つかの残丘状の溶岩丘は長谷・千藤・今西（前出）によって飯野溶岩類と総称された。

この溶岩類は飯野北方坂元の△705の山体をも構成しているので、坂元・下大河平・八幡ヶ丘にかけて古い（新第三紀末）火山体の中心が存在した可能性が強い。

～北部及び西部山地～

前述の、坂元の△705・高野・△861・固見山・百貫山・欠岳山・滝下山・黒園山の順に盆地の北側から西部にかけて並ぶ山地は、いずれも650m～860m（黒園山を除いて）の高さでもって盆地を囲んでいる。これらの山地と盆地を限る山壁が、いわゆる“加久藤カルデラ”的であると言われているもので、加久藤熔結凝灰岩噴出後の盆地陥没を示すものだとも言われている。

これ等の山地は、その下半部は新第三紀末の輝石安山岩質の溶岩・凝灰岩・崖錐性堆積物等で構成され、長谷・千賀・今西（前出）はこれを盆地底で発見した鍋倉層に相当するものとした。山地の上半部は、溶岩流の表面と考えられる平面（平野・矢岳高原）等が残存する前期洪積世の輝石安山岩質火山岩類で構成されている。

～南方霧島山地～

盆地の南側には霧島火山群の一部である栗野岳・飯盛山・白鳥山・瓶岳等があり、飯盛山と白鳥山と瓶岳の溶岩流が盆地に達し盆地の南縁となっている。

これらの溶岩類と盆地形成過程との関連は次のように考えられる。

①六万～八万年前に加久藤熔結凝灰岩の活動があり、間もなく、盆地が形成された。

②現在の霧島火山の付近に火山活動が活発となり、栗野岳火山の形成が始まり、また、これらの火山の噴出物や盆地壁からの崖錐の崩壊などで盆地が埋まり始めた。

③ついで白鳥火山の活動が始まり、これと相前後して南方からの軽石流の流入があった。

④盆地がほぼ埋め尽くされ清園層（泥質）が堆積していたころ、既に火山群となってかなり成長していた霧島火山を迂回して、小林市・鹿児島県薬野町方面から入戸火碎流が流入し、水面上に顔を出すまで堆積し盆地から溢れるような状態になった。

⑤その後、若干湖水面が下がってから疊層が形成され、瓶岳と飯盛山の溶岩流が流出して盆地に迫り、扇状地状の砂疊層を覆った。

⑥川内川の下流に従って中位段丘面・低位段丘面の順に河岸段丘が形成され、最終的に現在の川内川の川沿に広い一連の氾濫原がつくられ、現在にいたった。尚、飯野・加久藤・京町の市街地はこの氾濫原の上に立地している。

(3) 加久藤盆地周辺の地質に関する問題点

加久藤盆地周辺の地質に関しては次のような問題点が残されている。

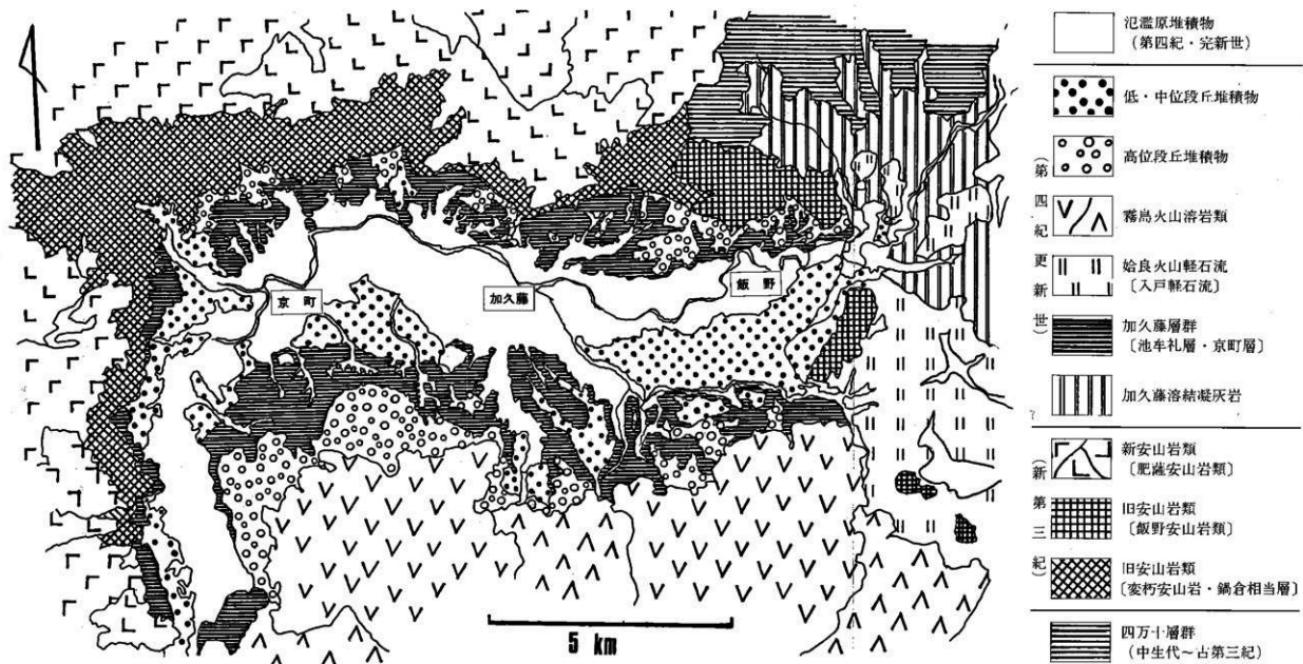
- ①盆地表層部の地層の層序について意見の違いがある。
- ②加久藤盆地の形成過程についても意見の違いがある。
- ③加久藤熔結凝灰岩の形成過程と分布範囲についても検討の必要がある。
- ④川内川の流路の変遷の推定については再検討の要がある。

氾濫原・崩積堆積物		表土 降下軽石・スコリア・火山灰等 およびそれらの風化堆積物	
日向ローム層(新期)			
低位段丘堆積物		飯盛山・飯岳溶岩流	低位・高位段丘堆積物
中位段丘堆積物			
高位段丘堆積物			
白鳥砂礫層			
桃ヶ瀬火山噴出物			
加久藤層群	下浦層	京町層	
	溝園層	池牛札層	
	幣田層	加久藤層群	
加久藤熔結凝灰岩		加久藤熔結凝灰岩 —加久藤カルデラ	
前期洪積世火山岩類		栗野・白鳥安山岩類 加久藤安山岩類 真幸変朽安山岩類	
層えび群の	池牛札層		
	鍋倉層		
四万十層群			
長谷・千藤・今西(1972)		荒牧(1968)	

加久藤盆地の地質層序表

第1図 加久藤盆地周辺地質略図

(太田・沢村(1971)、長谷・千藤・今西(1972)、遠藤(1979)を参考した)



(参考文献)

- 荒牧 重雄 (1968) 「加久藤盆地の地質－えびの・吉松地域の地震に関連して」『地震研究所彙報』vol.46 p.1325-1343.
- 有田 忠男 (1957) 「加久藤カルデラの提唱(演旨)」『地質学雑誌』vol.63 p.443-444.
- 遠藤 尚 (1979) 「前畠遺跡をとりまく地質的背景」『九州縦貫自動車道埋文化財発掘調査報告書(3)』宮崎県教育委員会 p.243-251.
- 長谷義隆・千藤忠昌・今西 浩 (1972) 「宮崎県加久藤盆地およびその周辺の新生界－その層序と地質構造」『熊本大理学部研究報告』2号 p.1-58.
- 伊田一善・本島公司・安国 昇 (1956) 「宮崎県小林市付近天然ガス調査報告」『地質調査所報告』No.168 p.1-44.
- 太田良平・沢村考之助 (1971) 「えびの・吉松地区地震震源域付近の地質」『防災科学技術総合研究報告』26号 p.35-45.
- 柴田 秀賢 (1969) 「霧島火山形成史」『地質学雑誌』vol.75 p.503-508.
- 種子田定勝 (1968) 「えびの・吉松地域の地震と地質」『火山』vol.13 p.61-73.

2. えびの市の歴史的環境

えびの市は、北の海拔700～800mの高原状高地と南の霧島火山などの山地に囲まれた東西約15km、南北約6kmの加久藤盆地に位置する。⁽¹⁾地形区分では、火山地が45.9%、山地が⁽²⁾18.4%、台地・段丘が12.4%、丘陵地が12.0%、低地が11.0%であり、火山地の割合が高い。盆地の中央部を川内川が東西に流れ、その支流が南北に流れている。これらの川に臨む丘陵・台地（低・中・高位段丘面）上に180ヶ所点在する。

旧石器時代

表採された遺物や発掘調査はない。

縄文時代

当地域の遺跡としては、飯野の小畠・坂元・二本松・原田、大河平字板の段・平小場・原塚、加久藤の大溝原・栗下、灰塚字高仏、真幸の昌明寺が知られていた。⁽³⁾

早期の遺跡としては山形押型文を出土した灰塚遺跡があり、前期の遺跡としては轟式を出土した灰塚遺跡・大迫遺跡がある。しかし、日向における中期遺跡の稀薄性のためか、当地においても中期土器は確認されていない。後期の遺跡としては出水式や小池原式系の土器を出土した前畑遺跡・小池原式系・鐘ヶ崎式系の土器を出土した灰塚遺跡がある。灰塚遺跡では晩期の黒色磨研土器も出土している。発掘調査によって竪穴住居などの生活遺構は確認されていない。

弥生時代

当地域の遺跡としては、飯野の天宮・池島・山内・仲王塚、坂元字広畠、大河平字平木場・元屋敷、原塚、加久藤の長江川・東長江浦、真幸の菅原神社境内・上島内が知られていた。

前期の遺跡は知られておらず、中期の遺跡も今回分布調査で逆L字口縁の菱形土器が表採された新田遺跡だけである。後期の遺跡としては免田式土器を出土した灰塚遺跡があり、後期末から古墳時代初頭の土器も出土している。竪穴住居などの生活遺構は発掘調査されていない。当地域の石庵丁としては県総合博物館蔵の飯野出土の4点、灰塚遺跡出土の2点、中棚遺跡出土の1点、田原陣遺跡出土の1点の計8点が知られているが、すべて外湾刃半月形石庵丁であり、方形石庵丁はない。⁽⁷⁾

古墳時代

生活造構である豎穴住居は発掘調査されていないが、円墳5基・地下式横穴墓25基が県指定を受けており、前方後円墳は存在しない。当地域の地下式横穴墓はえびの・大口市を中心とする第3地域に属する。⁽¹⁾ 地下式横穴墓群は川内川とその支流の両岸に西から島内・灰塚・小木原・芋畑・建山・杉水流の6グループに分けられ、洪積世の段丘砂礫上に分布する。板石積石室墓は島内・芋畑・杉水流で地下式横穴墓と共存している。当地域の地下式横穴墓の特徴は、すべて平入り長方形ないし楕円形プランで、羨道部閉塞以外に豎坑上部閉塞が存在することである。小木原・杉原・杉原41-1号地下式横穴墓から甲冑が出土していることから5世紀後半には地下式横穴墓の造営が始まり、それらの被葬者は小地域の首長層に相当する。6世紀前半に最盛期があり、6世紀後半まで継続して造営されたが、7世紀まで確実に降るものはない。また、胎土分析の結果、小木原A号地下式横穴墓から陶邑（大阪府）の須恵器が出土していることは注目される。

歴史時代

日向国の駅は『延喜式』によると計16駅あり、駅馬が各5疋用意された。日向国府（西都⁽²⁾）から敦武（国富町）→亞桿（綾町）→野後（野尻町）→夷守（小林市）→真研（えびの市）を経由して薩摩國の西海道西路に合流する。真研駅は大字灰塚字真崎に比定されている。法光寺跡から布目瓦が表採されて注目されていたが、今回の分布調査に伴なう試掘調査によって柱穴群や溝が検出された。また布目瓦が高台付塊・ヘラ切り底坏との共伴によって10世紀前半（平安時代中期）に比定されたのは大きな成果であった。しかし、遺構の性格が寺院跡なのか駅・役所跡なのかは試掘であったので把握できなかった。遺物としては蓮華寺出土の奈良期の纏骨器が知られている。

註

- (1) 遠藤 尚 「前畠遺跡をとりまく地質的背景」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告(3)』 1979
- (2) 経済企画庁総合開発局 「土地分類図(宮崎県)」 1974
- (3) 田中 熊雄 「宮崎県 繩文・弥生期考古遺物地名録」『宮崎県文化財調査報告書』 第2輯 1957
- (4) 石川恒太郎 「灰塚遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(2)』 1973

- (5) 石川恒太郎・北郷泰道 「前畠遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告(3)』
1979
- (6) (3)に同じ
- (7) 宮崎県総合博物館 『宮崎県総合博物館収品目録』 1982
- (8) 北郷 泰道 「平松地下式古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』 第22集 1980
- (9) 日高 正晴 「小木原古墳」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(1)』 1972
- (10) 東京国立博物館 『東京国立博物館収藏品目録』 1956
- (11) 石川恒太郎 「えびの町平松の地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』 第14
集 1969
- (12) 三辻利一・茂山 譲 「宮崎県下の遺跡出土須恵器の胎土分析」『宮崎考古』 第9号
1984
- (13) 藤岡謙二郎 「日向国」『古代日本の交通路 IV』 1979

II 埋蔵文化財包蔵地地名表

ま　さき　地　区　　1001～
真　幸　地　区

か　く　とう
加　久　藤　地　区　　2001～
加　久　藤　地　区

い　の
飯　野　地　区　　3001～
飯　野　地　区

1. 番号は地図の番号と一致している。
2. 旧番号のうち「台帳」は昭和38、49、52年度に作成した「宮崎県遺跡台帳」の遺跡番号、「地図」は昭和51年度刊行の「全国遺跡地図一宮崎県一」の遺跡番号である。

ま さき
真 幸 地 区 1001~1046

遺跡番号	名 称	所 在 地	種 別	時 代	旧 番 号		文 献	備 考
					地 図	台 載		
1001	島内地下式横穴群	大字島内字平松、杉ノ原	古墳(地下式)	古 墳	14-2		伊豆母 伊豆母	
1002	西ノ野第1遺跡	大字内豎字西ノ野	散布地	绳 文				
1003	西ノ野第2遺跡	大字内豎字西ノ野	散布地	绳 文				
1004	西ノ野第3遺跡	大字内豎字西ノ野	散布地	古 墳				
1005	大河平第1遺跡	大字内豎字大河平	散布地	绳 文				
1006	大河平第2遺跡	大字内豎字大河平	散布地	绳 文				
1007	大河平第3遺跡	大字内豎字大河平	散布地	绳 文				
1008	大河平第4遺跡	大字内豎字大河平	散布地	绳文~古墳				
1009	大河平第5遺跡	大字内豎字大河平	散布地	绳 文				
1010	後平第1遺跡	大字内豎字後平	散布地	绳文~古墳				
1011	後平第2遺跡	大字内豎字後平	散布地	绳 文				
1012	瀬戸口遺跡	大字内豎字瀬戸口	散布地	绳 文				
1013	山王前遺跡	大字内豎字山王前	散布地	绳文~平安				
1014	田平第1遺跡	大字内豎字田平、下鶯	散布地	绳文~古墳				
1015	田平第2遺跡	大字内豎字田平	散布地	绳文~古墳				
1016	田平第3遺跡	大字内豎字田平	散布地	绳 文				
1017	木場田遺跡	大字内豎字木場田	散布地	绳 文				
1018	矢岳第1遺跡	大字昌明寺字矢岳、山王	散布地	绳文~古墳				
1019	矢岳第2遺跡	大字昌明寺字矢岳	散布地	绳文~古墳				
1020	矢岳第3遺跡	大字昌明寺字矢岳	散布地	绳文~古墳				
1021	山王第1遺跡	大字昌明寺字山王	散布地	绳文~古墳				
1022	山王第2遺跡	大字昌明寺字山王、小鹿倉	散布地	绳文~弥生				
1023	前田遺跡	大字昌明寺字前田	散布地	绳文~古墳				
1024	高山遺跡	大字昌明寺字永野、前田、高山、湯ノ前、大字内豎字藤丸	散布地	绳文~平安				
1025	油田遺跡	大字昌明寺字油田	散布地	绳文~弥生				
1026	風戸遺跡	大字水波字風戸、大字西川北字四反田、瀬戸口、大字昌明寺字鬼山、小鹿倉	散布地	绳文~古墳				
1027	老松田遺跡	大字西川北字老松田	散布地	绳文~古墳				
1028	西小原遺跡	大字西川北字西小原	散布地	绳文~古墳				

遺跡番号	名 称	所 在 地	種 別	時 代	旧番号		文 献	備 考
					地図	古 輯		
1029	内 小 野 遺 跡	大字西川北字内小野、丹官平、五本松	散布地	縄文～弥生				
1030	牛 ケ 追 遺 跡	大字内豎字牛ヶ追、下鶴	散布地	縄文～古墳				
1031	下 鶴 遺 跡	大字内豎字下鶴、三反	散布地	縄文～古墳				
1032	松 尾 遺 跡	大字内豎字松尾	散布地	古 墳				
1033	宮 ノ 平 遺 跡	大字内豎字宮ノ平、松尾、 大字岡松字天神免	散布地	縄文～古墳				
1034	天 神 免 遺 跡	大字岡松字收涵、天神免、 朴ノ木、蓮花寺、椿木ヶ追、 七曲	散布地	縄文～古墳				
1035	岡 松 遺 跡	大字岡松字祖松、上鶴、蓮 花寺、井手本、前田、古溝、 枯木ヶ追、妙現、赤花、永 幸田、閑谷	散布地	古墳～平安				
1036	垣 傍 遺 跡	大字岡松字垣傍、鬼田	散布地	縄文～古墳				
1037	幣 田 遺 跡	大字柳水流字幣田、中瀬、 大字龜沢字山崎	散布地	縄文～平安				
1038	古 城 遺 跡	大字柳水流字古城、肥、下川	散布地	縄文～平安				
1039	中 浦 遺 跡	大字浦字高牟礼、肥、妙木、 水半田、金房、高柳、木場、 松ヶ道、新村、中原、新邑 下、大字向江字岩谷	散布地	弥生～古墳				
1040	島 内 遺 跡	大字島内字王子原、芝松ノ 元、柿ヶ追、三吉、立添、 平松、杉ノ原、日照	散布地	縄文～平安				
1041	三 古 城 跡	大字島内字三吉	城 跡	中 世			①	
1042	小 原 遺 跡	大字島内字小原、龜形	散布地	縄 文				
1043	岡 元 遺 跡	大字浦字桃ヶ迫、水呑、前 畑、池ノ原、肥畑、岡元、 原、入佐前、入佐、入佐後、 大字西長江浦字冠者、馬場 田、椿堀、西稗田、牧外戸、 諏訪平、諏訪追	散布地	縄文～平安			②	前畑遺 跡を含む
1044	宮 ノ 東 遺 跡	大字西川北字宮ノ東、宮ノ後	散布地	縄文～古墳			③	
1045	昌 明 寺 遺 跡	大字昌明寺字瀬戸山、油田	散布地	古 墳	14-1		④⑤⑥	
1046	芦 刈 遺 跡	大字西川北字芦刈、マツコ小屋	散布地	古墳～平安				

かくとう
加久藤地区 2001~2048

遺跡番号	名 称	所 在 地	種 別	時 代	旧 番 号		文 献	備 考
					地 図	台 標		
2001	彦山の板碑	大字東川北字彦山	建造物	室町			◎◎	正中津尾
2002	櫻田関跡	大字櫻田字牧之原	関所跡	近世			◎◎	
2003	灰塚地下式横穴群	大字灰塚字猫坂、四日市、高仏、大字西長江浦字西城	古墳群	古 墳	14-II	810	◎◎	
2004	ヨキトキ遺跡	大字東川北字ヨキトキ	散布地	縄文~古墳				
2005	妙見遺跡	大字東川北字妙見	散布地	縄 文				
2006	内牧遺跡	大字東川北字内牧	散布地	弥生~古墳				
2007	古屋敷遺跡	大字東川北字古屋敷	散布地	古墳~平安				
2008	天神元遺跡	大字東川北字天神元	散布地	縄文~弥生				
2009	天神後第2遺跡	大字東川北字天神後	散布地	縄文~古墳				
2010	天神後第1遺跡	大字東川北字天神後	散布地	縄 文				
2011	天神後第3遺跡	大字東川北字天神後	散布地	平 安				
2012	平原遺跡	大字東川北字平原	散布地	縄文~古墳				
2013	彦山第4遺跡	大字東川北字彦山	散布地	古 墳				
2014	彦山第5遺跡	大字東川北字彦山	散布地	古 墓				
2015	彦川遺跡	大字東川北字彦川、吹ヶ迫	散布地	縄文~平安				
2016	東原遺跡	大字東川北字東原、寺田	散布地	縄文~古墳				
2017	牧之原遺跡	大字櫻田字牧之原、丸尾 大字東川北字有ヶ迫	散布地	古 墓				
2018	丸尾遺跡	大字櫻田字丸尾、猿田、大字小田字岩井	散布地	縄文~平安				
2019	埋土遺跡	大字小田字埋土	散布地	縄文~平安				
2020	加久藤城跡	大字小田字城内	城 蹤	古墳~中世	14-4	927	◎◎	
2021	城内第1遺跡	大字小田字城内	散布地	古 墓				
2022	城内第2遺跡	大字小田字城内	散布地	縄文~古墳				
2023	城内第3遺跡	大字小田字城内、鬼岩 大字大明司字尾山	散布地	縄文~古墳				
2024	彦山第3遺跡	大字東川北字彦山	散布地	中 世				
2025	甘里遺跡	大字小田字甘里	散布地	縄文~平安				
2026	人溝原遺跡	大字永山字大溝原、大字西郷字西原河間、大溝原、大字湯田字大溝原	散布地	縄文~平安				

遺跡番号	名 称	所 在 地	種 別	時 代	旧 番 号		文 献	備 考
					地 国	古 墳		
2027	藤原遺跡	大字西長江浦字藤原、牛ヶ追	散布地	縄文～古墳				
2028	杉ヶ平遺跡	大字西長江浦字杉ヶ平	散布地	縄文～古墳				
2029	灰塚遺跡	大字灰塚字猪坂、高仏、四日市、大字西長江浦字西城	散布地	縄文～平安				
2030	中ノ原遺跡	大字西長江浦字中ノ原、笠元、瀬田、川内、仏坂	散布地	縄文～古墳				
2031	長牟田遺跡	大字西長江浦字長牟田、平田	散布地	古 墳				
2032	新田遺跡	大字西長江浦字肥シ、新田、新田前	散布地	縄文～平安				
2033	大原遺跡	大字西長江浦字大原	散布地	弥生～平安				
2034	内丸遺跡	大字西長江浦字内丸、一社、新田下、田中	散布地	古墳～平安				
2035	谷川第1遺跡	大字栗下字谷川	散布地	平 安				
2036	谷川第2遺跡	大字栗下字谷川	散布地	弥生～古墳				
2037	城ヶ崎遺跡	大字栗下字城ヶ崎	散布地	弥 生				
2038	柿ノ木城跡	大字栗下字城字都	城 跡	弥生～平安			④	
2039	鶴田越遺跡	大字東長江浦字鶴田越、五反田	散布地	古 墓				
2040	浜川原遺跡	大字東長江浦字浜川原、前平	散布地	古 墓				
2041	前平遺跡	大字東長江浦字前平、麻ヶ追	散布地	縄文～古墳				
2042	麻ヶ追第1遺跡	大字東長江浦字麻ヶ追	散布地	古 墓				
2043	麻ヶ追第2遺跡	大字東長江浦字麻ヶ追	散布地	縄 文				
2044	彦山第2遺跡	大字東川北字彦山	散布地	古墳～中世				
2045	鶴満城跡	大字東川北字本丸、鶴川	城 跡	中 世	14-3	926	④⑤	
2046	寺園遺跡	大字東川北字寺園、本丸、掌亭、鶴川、野久首、大字西川北字向江原	散布地	縄文～平安				
2047	畠田城跡	大字東長江浦字城ノ下	城 跡	中 世			①	
2048	野久首遺跡	大字東川北字野久首	散布地	縄 文				

飯野地区 3001~3086

遺跡番号	名 称	所 在 地	種 別	時 代	旧 番 号		文 献	備 考
					地 国	台 帳		
3001	建山地下式横穴群	大字原田字建山、中橋、堀ノ内、池ノ原、龜田、小原、小原前、大字上江字村ノ脇、宮道、鐵野1、7、8、9、10、11、12、13、14、15、16、17、18号墳	古墳群 (地下式)	古 墳	14-18		◎◎◎	
3002	小木原地下式横穴群	大字上江字小木原、久見追、馬頭、麻、長谷川、地主原、宮原、鳥越	古墳群 (地下式)	古 墳			◎◎◎◎	
	A 小木原地下式横穴群	鐵野2、3、5、6号墳			14-15		◎◎◎◎	
	B 久見追地下式横穴群				14-16		◎	
	C 黑頭始地下式横穴群				14-17		◎	
3003	鐵野4号墳	大字原田字達日塚	古墳(方)	古 墳	14-19		◎	
3004	芋焼地下式横穴群	大字坂元字二本杉、油木ノ元、二八山の上	古墳群 (地下式)	古 墳	14-5	811	◎	
3005	杉木流地下式横穴群	大字杉木流字大杉元、田畠道添、門田	古墳群 (地下式)	古 墳	14-7	812	◎	
3006	平藏ヶ野遺跡	大字大河平字平藏ヶ野	散布地	繩文~古墳				
3007	元風城遺跡	大字大河平字元風敷	散布地	繩 文				
3008	桜野遺跡	大字大河平字下平田、鷺須、松山下左田、椎木平、牧神山口下平田、桜野、元風敷丸岡、中島、大丸東、平藏ヶ野	散布地	繩文~古墳				
3009	中島遺跡	大字大河平字中島、京塚	散布地	古 墳				
3010	椎木平遺跡	大字大河平字椎木平、鷺下	散布地	繩文~古墳				
3011	下平田遺跡	大字大河平字下平田、鷺須	散布地	繩文~古墳				
3012	川上遺跡	大字大河平字川上	散布地	古 墳				
3013	惣ノ口第1遺跡	大字大河平字惣ノ口、牧神	散布地	繩文~古墳				
3014	惣ノ口第2遺跡	大字大河平字惣ノ口、牧神、永野原	散布地	繩文~古墳				
3015	柿木原遺跡	大字大河平字柿木原、永野原	散布地	繩文~平安				
3016	仏坂遺跡	大字大河平字仏坂	散布地	繩文~古墳				
3017	終野第2遺跡	大字大河平字終野	散布地	繩文~古墳				
3018	菖蒲ヶ野遺跡	大字大河平字仏坂、上原、菖蒲ヶ野、非川元、久保下、小坂元、下水流	散布地	繩文~古墳				
3019	佐牛野遺跡	大字大河平字佐牛野、石原アシカリ石水流	散布地	古 墳				
3020	小牧遺跡	大字大河平字小牧	散布地	古 墓				
3021	木場遺跡	大字大河平字木場	散布地	古 墓				

遺跡番号	名 称	所 在 地	種 別	時 代	旧番号		文 献	備 考
					地図	台帳		
3022	久保原遺跡	大字大河平字石井手、笠牟田	散布地	古 墳				
3023	笠牟田遺跡	大字大河平字笠牟田	散布地	古 境				
3024	石井手遺跡	大字大河平字石井手	散布地	弥 生				
3025	平田遺跡	大字大河平字平田	散布地	繩 文				
3026	戦倉第1遺跡	大字大河平字戦倉、平田	散布地	繩文～古墳				
3027	戦倉第2遺跡	大字大河平字戦倉	散布地	古 墳				
3028	中須遺跡	大字原田字中須	散布地	繩文～平安				
3029	愛染院遺跡	大字原田字愛染院、水口、金丸	散布地	古 墳				
3030	祇園遺跡	大字原田字祇園	散布地	古墳～平安				
3031	飯野城跡	大字原田字城内	城 隅	中 世			④	
3032	櫛荷下遺跡	大字坂元字櫛荷下、宮田	散布地	繩文～平安				
3033	広畑遺跡	大字坂元字二本杉、油木の元、広畑、二八山の上、大字大明司字越シ、平田	散布地	繩文～古墳				
3034	芋畠第1遺跡	大字坂元字芋畠	散布地	繩文～古墳			④	
3035	芋畠第2遺跡	大字坂元字芋畠	散布地	繩文～古墳			④	
3036	北木場第1遺跡	大字坂元字北木場	散布地	繩 文			高野 高木	
3037	北木場第2遺跡	大字坂元字北木場	散布地	繩 文				
3038	芋畠第3遺跡	大字坂元字芋畠	散布地	繩文～古墳			④	
3039	山神原遺跡	大字坂元字芋畠、大字大明司字山神原、六本原	散布地	繩文～古墳				
3040	六本原第1遺跡	大字大明司字六本原	散布地	繩文～古墳				
3041	六本原第2遺跡	大字大明司字六本原	散布地	繩 文				
3042	六本原第3遺跡	大字大明司字六本原	散布地	繩 文				
3043	六本原第4遺跡	大字大明司字六本原	散布地	古 墓				
3044	老合原遺跡	大字大明司字六本原、山神原、老合原	散布地	古 墓				
3045	大明司鳥越遺跡	大字大明司字鳥越	散布地	古 墓				
3046	越シ遺跡	大字大明司越シ	散布地	古 墓				
3047	村ノ前遺跡	大字末永字村ノ前、山下、平田	散布地	繩文～古墳				
3048	林野第1遺跡	大字末永字上原、吉久保、羽子田、鳥井原、東原、中村、山下、中丸、西原、蓼原、大字東長江字城ノ下長谷、刈谷、平田、林野、宇津木原、中原、大字栗下字城字都	散布地	繩文～平安	14-12 13	814 815	④⑤	

遺跡番号	名 称	所 在 地	種 別	時 代	旧 番 号		文 献	備 考
					地図	台帳		
3049	曲田遺跡	大字末永字曲田	散布地	縄文～古墳				
3050	赤坂遺跡	大字末永字梨ノ木、赤坂	散布地	弥生～古墳				
3051	上村第1遺跡	大字末永字上村、大岩元、平木場	散布地	古 墳				
3052	上村第2遺跡	大字末永字上村	散布地	古 墓				
3053	赤谷遺跡	大字末永字赤谷	散布地	古 墓				
3054	長野第1遺跡	大字末永字長野	散布地	古 墓				
3055	長野第2遺跡	大字末永字長野	散布地	古 墓				
3056	桜木原遺跡	大字末永字鼓野、馬鹿、出水、 桜木原	散布地	縄文～古墳				
3057	出水遺跡	大字末永字毛ヶ瀬、出水	散布地	中 世				
3058	瀧谷遺跡	大字末永字瀧谷	散布地	縄文～弥生				
3059	井穴遺跡	大字末永字井穴	散布地	縄文～古墳				
3060	後追遺跡	大字末永字後追	散布地	平 安				
3061	天宮遺跡	大字末永字天宮、池頭、後追	散布地	縄文～古墳				
3062	田代遺跡	大字末永字上田代、青木前、 後追、松山、石坂、滝崩、 竹ノ内、峯崎	散布地	縄文～古墳				
3063	妙見原遺跡	大字原田字妙見原、原原原	散布地	縄文～古墳				
3064	田原障遺跡	大字原田字田原障	散布地	弥 生				
3065	嵩ノ木遺跡	大字原田字嵩ノ木	散布地	弥生～古墳				
3066	石落下遺跡	大字原田字石落下、田原障 杉庄、小岡下、木場添、妙見原	散布地	縄文～古墳				
3067	駒ノ平第1遺跡	大字原田字駒ノ平	散布地	弥 生				
3068	駒ノ平第2遺跡	大字原田字駒ノ平	散布地	古 墓				
3069	駒ノ平第3遺跡	大字原田字駒ノ平	散布地	古 墓				
3070	大迫原遺跡	大字原田字駒ノ平、大迫原、 大迫、川添、嵩ノ木	散布地	縄文～古墳				
3071	大迫第1遺跡	大字原田字大迫	散布地	古 墓				
3072	大迫第2遺跡	大字原田字大迫	散布地	縄 文				
3073	鳥越遺跡	大字上江字鳥越	散布地	縄文～古墳	14-20	813	◎◎	
3074	永田原遺跡	大字今西字蔦下、広田、小 原下、永田原、大刀洗河、 大字池島字鳥越、二月田	散布地	平安～中世				
3075	口ノ坪遺跡	大字今西字松ノ下、口ノ坪、 大字上江字山神	散布地	平 安				

遺跡番号	名 称	所 在 地	種 別	時 代	旧 番 号		文 献	備 考	
					地図	台帳			
3076	原田、上江遺跡	大字大河平字金和松、山宮、大字杉水流字連田、妙見、道添、五日市、門田、法泉坊、新村 大字原田字遠目塚、樅ノ口、五日市、田神下、連田落、内村前、野中田、遠目塚前、雀宮、大平落、城元、八幡前、八幡、八幡下、鞍掛、鬼塔、本地原、神社原、觀音原、雄山、塚ノ内、水入下、中棚、水入横手、檜原、池ノ原、小原、松元前、小原前、有島東、千世松、上薺東、菟田、鶴園、大字上江字田上、福川原、北田、宮越、羽山、柳ノ内、村ノ崩、小屋恋、野中田、上原、妙見、馬場添、前原、馬場下、薺田、七口市、野間川、古城、山神、藏元、法光寺、益田、安元、寺田、六源市、宮原、杉ノ元、長谷川、地主原馬頭、久見追、薺、小木原、鳥越上越	散布地	繩文～平安					
3077	杉水流遺跡	大字杉水流字市園、大杉元、曾我塚、野付、石橋、下長駒、引田、四反田、金丸、古川、源訪前、妙吐、前田、赤池、横峰、新村、田畠 大字原田字池元	散布地	古 墳					
3078	茶屋平遺跡	大字大河平字並石、栗木棚戸、茶屋平、蘿坂、大字原田字茶屋平、蘿坂、中野	散布地	繩文～古墳					
3079	尾山遺跡	大字大明司字尾山	散布地	平 安					
3080	内戈谷第1遺跡	大字大河平字内戈谷	散布地	繩 文					
3081	内戈谷第2遺跡	大字大河平字内戈谷	散布地	繩文～古墳					
3082	内戈谷第3遺跡	大字大河平字内戈谷	散布地	繩 文					
3083	法光寺跡	大字上江字法光寺	寺 跡	平 安			①②		
3084	鍋倉遺跡	大字大河平字鍋倉、鍋倉川原、桂木追、内之倉、草萩原	散布地	古 墳					
3085	道谷遺跡	大字大河平字道谷、風占追、宮内	散布地	古 墳					
3086	佐院遺跡	大字原田字中島、金丸、佐院	散布地	古 墳					

III 主要遺跡概説

1. えびの市内の地下式横穴墓群と地下式板石積石
室墓群
2. 小木原地下式横穴墓群 (3002)
3. 島内地下式横穴墓群 (1001)
4. 灰塚遺跡 (2003)
5. 中棚60-1号地下式横穴墓 (3001)
6. 永田原遺跡 (3074)
7. 法光寺跡 (3083)

1. えびの市内の地下式横穴墓群と地下式板石積石室墓群

えびの市の市内の地下式横穴墓群は、川内川左岸の島内地下式横穴墓群、池島川右岸の小木原地下式横穴墓群（久見追支群・馬頭支群を含む）、川内川右岸の芋畑地下式横穴墓群、長江川左岸の灰塚地下式横穴墓群、川内川と二級川に挟まれた建山地下式横穴墓群、川内川左岸の杉水流地下式横穴墓群に分かれる。地下式横穴墓群は洪積世の砂丘砂礫上に約3km間隔で分布し、6遺跡で計60基調査されている。地下式板石積石室墓は、島内・杉水流・芋畑地下式横穴墓群でも発見されているが未調査であり、灰塚地下式横穴墓群では円形プランが3基発掘調査されている。

当地域の地下式横穴墓の特徴としては、すべて平入り長方形プランないし梢円形プランで、羨道部閉塞以外に豊坑上部閉塞が存在することである。馬頭・久見追地下式横穴墓群は羨道閉塞で、灰塚地下式横穴墓群は豊坑上部閉塞で、小木原・島内地下式横穴墓群は共存している。

甲冑を出土している島内・小木原地下式横穴墓群では、小地域の首長の系譜は、島内41-1号地下式横穴墓（三角板錦留短甲・5世紀中頃）→杉原地下式横穴墓（横矧板錦留短甲・小札錦留衝角付冑・5世紀後半）→54-2号地下式横穴墓（金銅装胡錦金具・5世紀後半～6世紀初頭）→10-1号地下式横穴墓（馬具・6世紀前半）、小木原1号地下式横穴墓（横矧板錦留短甲・横矧板錦留衝角付冑・5世紀後半）→3号地下式横穴墓（横矧板錦留短甲・馬具・5世紀後半～末）→古墳（獸形鏡・馬具・5世紀末～6世紀初頭）→馬頭1・5・13・14号、久見追6号地下式横穴墓（6世紀前半～中頃）と追える。甲冑を出土せず、馬具を有する久見追・馬頭地下式横穴墓群は次のようになる。馬頭地下式横穴墓群は主軸によってA群（1・5・7・13・14号）・B群（3・6・10・12号）に分かれる。A群の1・5・14号は剣・刀・鎌・馬具がセットでそろっており、有力家父長層の墓に比定され、6世紀前半を中心とする地下式横穴墓群である。久見追地下式横穴墓群は主軸によってA群（1・4・6・7号）・B群（2・3・8・10号）に分かれる。A群の6号のみが剣・刀・鎌・馬具がセットでそろっており、有力家父長層の墓に比定され、6世紀中頃を中心とする地下式横穴墓群である。灰塚地下式横穴墓群は主軸によってA群（7・10・17号）・B群（8・9・13号）・C群（12・16号）・D群（11・14・15号）に分かれる。馬具を副葬せず、剣・刀・鎌のセットであるので、有力家父長層の突出がない均質的な群集墓である。6世紀前半を中心とする地下式横穴墓群である。

当地域は、島内41-1号地下式横穴墓の5世紀中頃を上限として、5世紀後半には島内地下式横穴墓群と小木原地下式横穴墓群の二大勢力が併立するが、6世紀になると馬頭・久見追支群を擁する小木原地下式横穴墓群が一大勢力を伸ばし300基も造営する。遺物で7世紀に降るものはなく、下限は6世紀後半である。

2. 小木原地下式横穴墓群

小木原地下式横穴墓群は、川内川と池島川に挟まれた台地（低位段丘面）の西端部に位置し、標高約250mで比高差約20mである。小木原支群の7基、馬頭支群の14基、久見追支群の10基が発掘調査されている。昭和44年以降の砂利採取作業によって破壊されていく地下式横穴墓を木崎原操氏は精力的な踏査・記録によって計313基（前述の31基を含む）を確認し、第2図の分布地図を作成された。

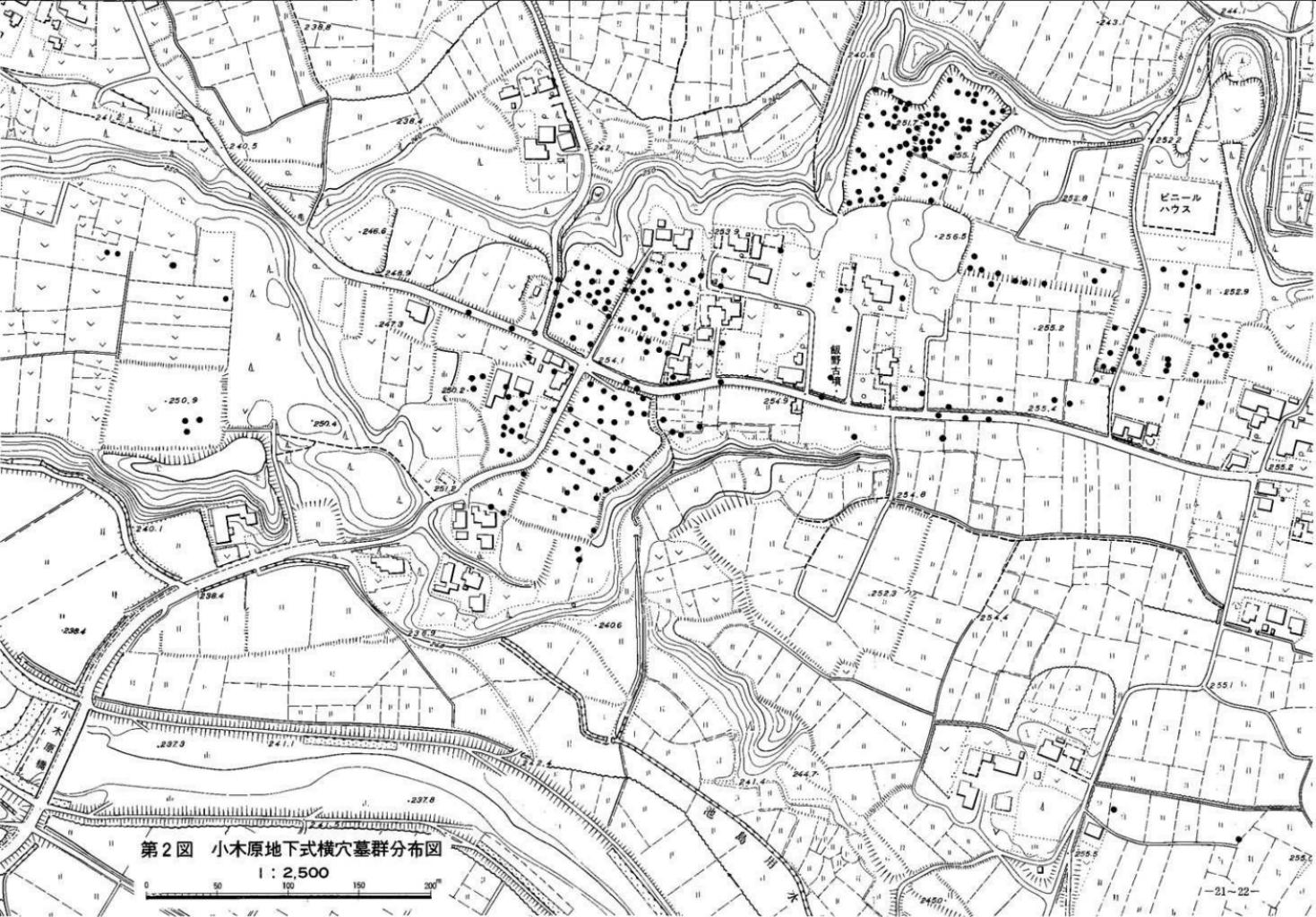
九州縦貫自動車道建設に伴なって昭和44年に調査された小木原古墳は、直径16m、高さ1.2mの墳丘を有し、内部主体は後道閉塞の平入り長方形プランの地下式横穴墓である。玄室内から仿製獸形鏡1、劍1、刀1、鐵鎌27、刀子1、轡が、豎坑上部からII期の須恵器が出土している。地下式横穴墓は本来的にはすべて標識的な「墳丘」を有していたと推定され、直径20m級の墳丘を有する地下式横穴墓は小地域集団の首長に比定される。

昭和44年に1号地下式横穴墓から横矧板鉢留衡角付背1・横矧板鉢留短甲1・劍1・刀2が出土し、昭和49年にも3号地下式横穴墓から横矧板鉢留短甲1・刀1・劍2・鎌27・馬鐸1・轡・F字形鏡板が出土しており、小木原古墳の前段階の首長である。

小木原地下式横穴墓群の特徴は、小木原支群では豎坑上部閉塞と羨道閉塞が共存するのに對して、馬頭支群・久見追支群ともすべて羨道閉塞である。当地下式横穴墓群は1号墳の5世紀後半を上限として、6世紀後半まで造営される。

3. 島内地下式横穴墓群

島内地下式横穴墓群は、川内川左岸の標高約230mの台地に位置する。昭和8年に12基の地下式横穴墓が真幸村古墳で県指定された。東京国立博物館収蔵資料の中に大字島ノ内字杉ノ原に円墳が5基があり、明治38年の開墾によってその中の径15間、高さ4尺の円墳の「石椁」から横矧板鉢留短甲・小札鉢留衡角付背・刀・鐵鎌が出土したということであるが、「日向の



第2図 小木原地下式横穴墓群分布図

1 : 2,500

0 50 100 150 200

伝説と史蹟によれば「徑15間、高さ4尺」の墳丘を有する地下式横穴墓である。昭和41年にも竪坑上部閉塞の平入り楕円形プランの地下式横穴墓から三角板鉢留短甲・劍・鑓・刀子・斧・鐵鎌が出土している。昭和54年には羨道部閉塞の平入り隅丸方形プランの54-2号地下式横穴墓から金銅装胡麻金具が出土している。現在までに11基調査されており、平入り長方形・楕円形プランで、竪坑上部閉塞と羨道部閉塞が共存しているのが特徴である。当地下式横穴墓群の上限は、甲冑を出土した地下式横穴墓の5世紀後半に比定される。

4. 灰塚遺跡

灰塚遺跡は、川内川の支流である長江川の西岸の台地（中位段丘面）に位置し、標高260mで比高差33mである。九州縦貫自動車道建設に伴なって昭和48年に発掘調査が行なわれた結果、縄文早期～晩期の土器・石匙、弥生後期～終末期の土器・免田式土器・石庖丁が出土し、地下式横穴墓17基・地下式板石積石室墓3基が検出された。

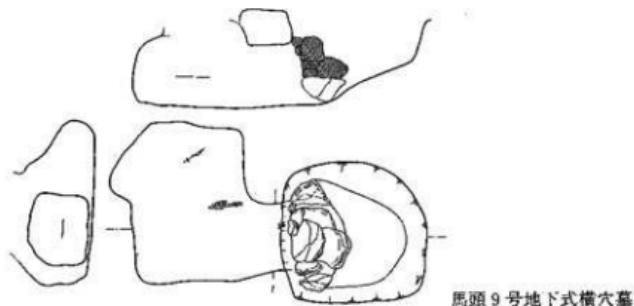
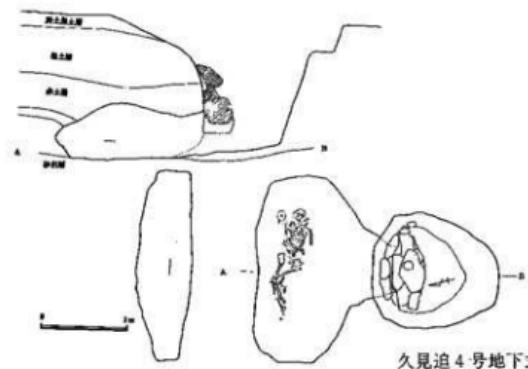
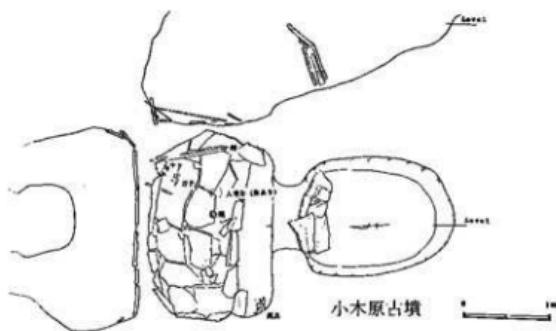
免田式土器は3個出土しており、3本の平行沈線の上に同心円の半分の沈線を描いている。県内では五ヶ瀬川の上流域、大淀川下流域・上流域に集中しており、12遺跡で出土している。

当地下式横穴墓はすべて平入り長方形プランの竪坑上部閉塞であり、副葬品としては劍・鐵鎌の組み合わせが多い。主軸の方向から2～3基を単位とする4グループに分けられ、甲冑や馬具の副葬が見られず、有力家父長層の突出がない均質的な群集墓である。17号地下式横穴墓の竪坑上部から出土した土師器高杯・二段逆刺鉄鎌から6世紀前半に比定される。

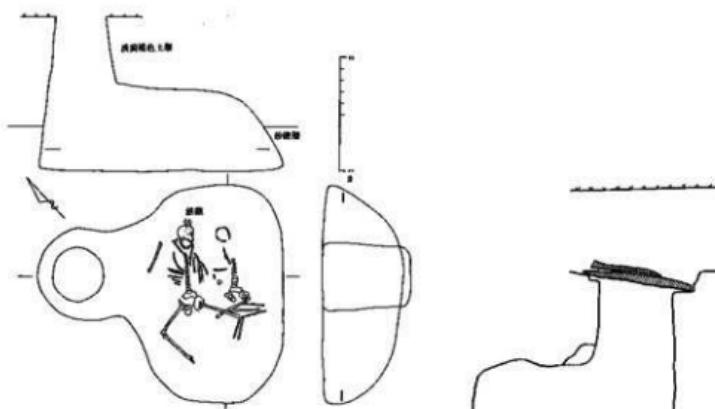
9号地下式横穴墓は、壯年の男性1、壯年の女性1、熟年の女性2が葬られており、3体の頭骸骨を西隅に寄せた後に中央に壯年の男性か女性を葬っている。

地下式板石積石室墓はすべて直徑2mの円形プランを呈しており、劍と平根主頭式鎌の組み合わせである。

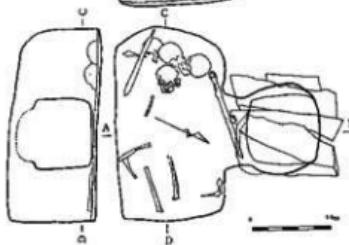




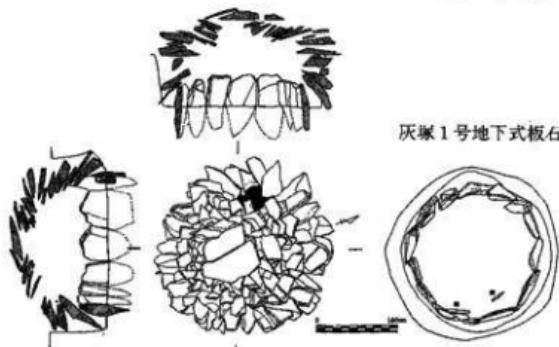
第4図 地下式横穴墓実測図（I）



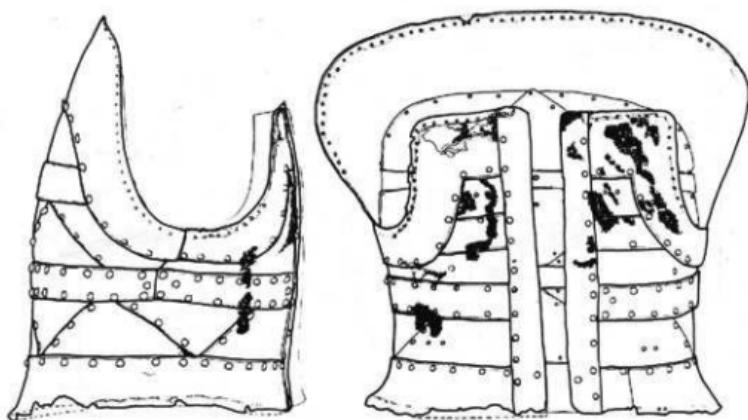
島内54-4号地下式横穴墓



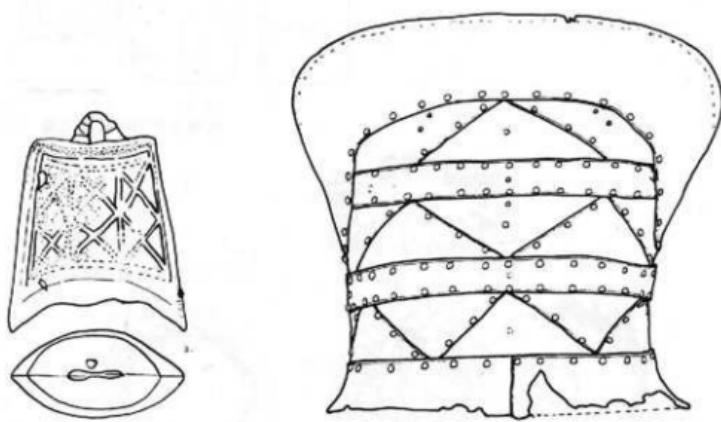
灰塚9号地下式横穴墓



第5図 地下式横穴墓実測図 (II)

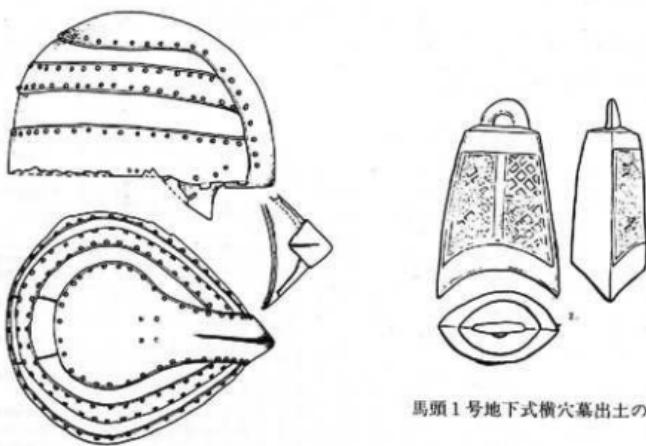


島内41-1号地下式横穴墓出土の三角板銛留短甲



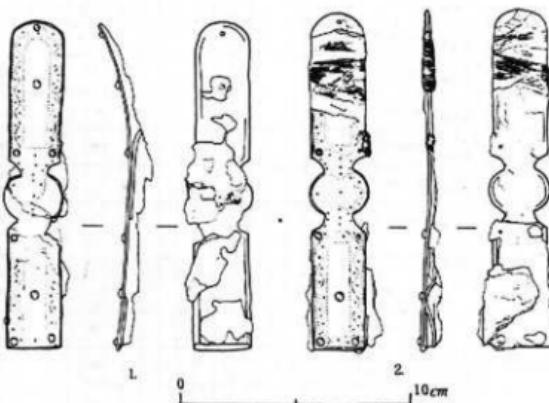
小木原3号地下式横穴墓出土の馬鐶

第6図 地下式横穴墓出土遺物実測図(1)



馬頭1号地下式横穴墓出土の馬鐸

小木原1号地下式横穴墓出土の衝角付胄



島内54-2号地下式横穴墓

第7図 地下式横穴墓出土遺物実測図（II）

えびの市地下式横穴墓地名表(Ⅰ)

番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	ボーラン	東京機械 製作所 ×幅 cm	鉢 底 身 蓋 小 耳 刀 身 子 馬 土器 類 出 量	器						人骨	備 考	文献			
							武具・武具 甲・刀・鎧 刀・鎧	身	蓋	小	耳	刀	身	子	馬	土器		
1	中郷 60-1号	3001	草野字中郷	平入り 底方形	150×162			3									令語報告 堅城防寒	
2	馬頭 1号	3002 C	上江字馬頭	平入り 底方形	116×255		2	2	28	1			3			堅城防寒	馬頭2 坚城防寒 雲母	24
"	2号			平入り 底方形	85×177				2								普通防寒	
"	3号			平入り 底方形	70×200								1				普通防寒	
"	5号			平入り 底方形	150×255		1	4	7			4				堅城防寒		
"	6号			平入り 側内形	100×180												普通防寒	
"	7号			平入り 底方形	155×360			2				1				堅城防寒 普通防寒		
"	8号			平入り 底方形	147×227				4							普通防寒		
"	9号			平入り 片底方形	120×178		1	1				2				普通防寒		
"	10号			平入り 底方形	100×180		1									普通防寒		
"	11号			平入り 底方形	110×215			1				1				普通防寒		
"	12号			平入り 底方形	170×230		1	5								普通防寒		
"	13号			平入り 底方形	105×150			○								堅城 普通防寒		
"	14号			平入り 底方形	120×230		1	1	4			4				普通防寒		
3	久見追 1号	3002 B	上江字久見追	平入り 底方形	125×230		1	20			2					○		24
"	2号			平入り 片袖	150×150											○		
"	3号			平入り 底方形	190×240		1				1					2	蛇行斜	
"	4号			平入り 底方形	130×250											1	普通防寒(粘土)	
"	5号			平入り 底方形	40×165				2									
"	6号			平入り 底方形	170×270		1	1	2								普通防寒(粘土)	
"	7号			平入り 底方形	130×230		2	3			1						普通防寒(粘土)	
"	8号			平入り 底方形	30×125												普通防寒(粘土)	
"	9号			平入り 底方形	70×220						1					○	普通防寒(粘土)	
"	10号			平入り 底方形	185×220		1	1									普通防寒(粘土)	
"	1号土地			円	75×105											馬骨		
4	小木原 古墳	3002 A	上江字小木原	平入り 底方形	170×250	鐵石	1	1	27	1		1					堅城鏡(青) 刀身、普通防寒(石)	22
"	A号			平入り 側内形	180×245			1	3								普通防寒(石)	
"	A墳			平入り 底方形	90×165											1	堅城上部防寒(石)	14
"	B墳			平入り 底方形	140×200												堅城上部防寒(石)	
"	1号						1	1	2								馬角骨1 頭骨1	18

えびの市地下式横穴墓地名表(II)

番号	地名	通称番号	所在地	平面 プラン	主室後幅 奥行 ×幅 cm	副葬品										人骨	備考	文献	
						武器・武器	板 甲 盾	刀 槍	銃	冠 玉	斧 鎌	小 玉	刀 子	斧 子	馬 具	土器 陶 具			
小木原 3号						1	2	○	○									28	
# 101号			平入り 長方形	150×200		2	1	7							1		3	貝輪(イモガイ) 床道閉塞	18
5 床塚 1号	2005	西脇江字床塚	平入り 長方形	80×160															25
# 2号			平入り 長方形	120×190		1	○											子 堅坑閉塞	
# 3号																		堅坑閉塞	
# 4号			平入り 長方形	95×170															
# 5号			平入り 長方形	117×160				2										二段造剥	
# 6号			平入り 長方形	125×185		3												堅坑閉塞	
# 7号			平入り 長方形	100×145		1											1	熟年女性 堅坑閉塞	
# 8号			平入り 長方形	95×170		2	3											堅 堅坑閉塞	
# 9号			平入り 長方形	80×148		1	1	3									4	熟年女性 堅坑閉塞	
# 10号			平入り 長方形	120×173													2	堅坑閉塞	
# 11号			平入り 長方形	100×145		1	1	1										堅坑閉塞	
# 12号			平入り 長方形	100×150		1	9											二段造剥 堅坑閉塞	
# 13号			平入り 長方形	97×140		1												堅坑閉塞	
# 14号			平入り 長方形	100×168		1												堅坑閉塞	
# 15号			平入り 長方形	90×150		1	3											堅坑閉塞	
# 16号			平入り 長方形	60×185		1											1 (男)	二段造剥 堅坑閉塞	
# 17号			平入り 長方形	150×160		1	4										1 (女)	二段造剥 堅坑閉塞	
6 墓内字 杉原	1001	墓内字杉原				1	4	○	○									精妙な調査結果 小石器類角竹青	
# 10-1						3	○			○							3	所生閉塞	
# 41-1			平入り 楕円形	135×191		1	2	6				1	1	1			1	三角底狹窄深平 ・堅坑閉塞	15
43-1			墓内字平松	183×230		1	18					2					2	狭道閉塞(粘土)	17
# 43-2			平入り 楕円形	140×180													1	貞絆3 堅坑閉塞	*
# 46-1			平入り 長方形	120×185													1	堅坑閉塞	19
# 46-2			平入り 長方形	120×195		1	8										3~4	貞絆4 堅坑閉塞	*
# 52-1			平入り 長方形	110×140		1	11										1	堅坑閉塞	33
# 54-1			平入り 楕円形	131×185		1	7				2						2~3	狭道閉塞(板石)	37
# 54-2			平入り 長方形	215×231		1	16				2						2	胡麻丸真 狭道閉塞(板石)	*
# 54-3			平入り 長方形	125×178		1	8										3	堅坑閉塞(板石)	*
# 54-4			平入り 楕円形	119×189			2										2	堅坑閉塞(板石)	*

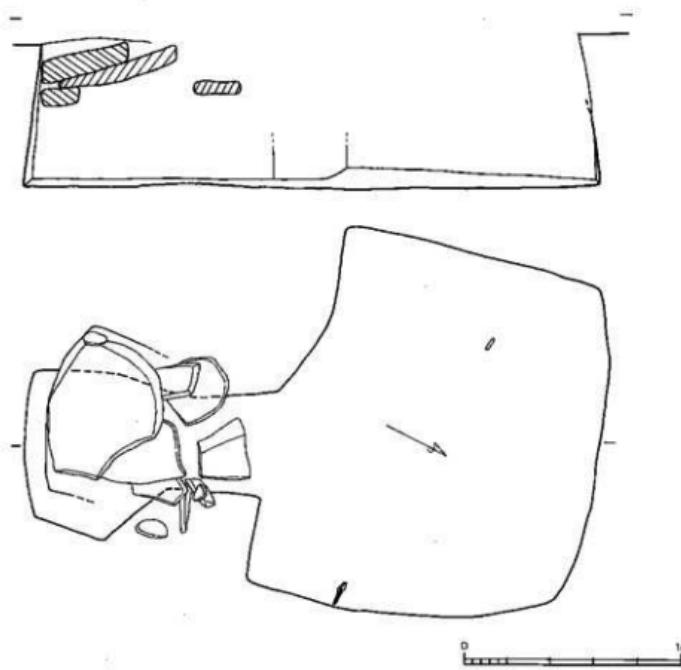
5. 中棚60-1号地下式横穴墓 えびの市大字原田字中棚

中棚60-1号地下式横穴墓は、川内川とその支流である池島川に挟まれた低位段丘面の東部に位置する建山地下式横穴墓群の1基であり、川との比高差は35m（標高約275m）である（第8図）。建山地下式横穴墓群は、昭和10年7月2日に字建山と中棚所在の地下式横穴墓が12基県指定された。当地でかつて地下式横穴墓が陥没したというので、昭和60年5月28日から31日に発掘調査を行なった。その結果、地下式横穴墓1基と南北に走る幅5.0m、深さ0.8mの溝が検出された。

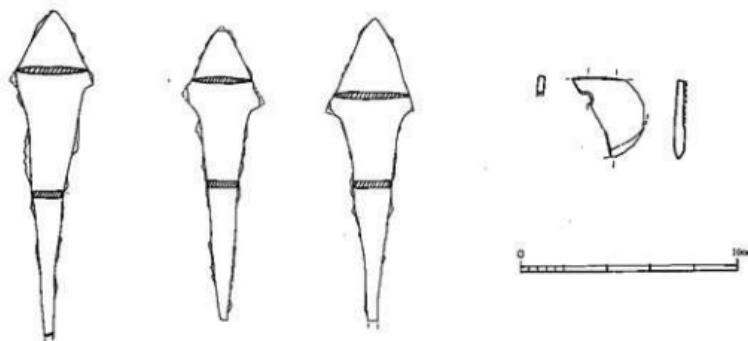
地下式横穴墓は既に玄室と狭道部の天井部が陥没しており、中には土がつまっていた。玄室の床面は砂礫層で、天井部はアカホヤ層に掘り込んでいたと推定される。玄室の構造は平入り両袖長方形プランで、規模は幅162cm、奥行き150cmである（第9図）。閉塞方法は竪坑上部閉塞で、約60×55cmの板石などを数枚使用している。竪坑上部の一部は破壊されているのでプランは不明であるが、現存している一辺は約80cmである。玄室の東壁のそばから平根頭式の鉄鎌が3本まとめて出土した（第10図）。玄室内の埋土から外湾刃半月形石庖丁の破片も出土している（第10図）。地下式横穴墓の構造と鉄鎌の形態から6世紀前半に比定される。



第8図 中棚60-1号地下式横穴墓周辺の地形図



第9図 中棚60-1号地下式横穴実測図

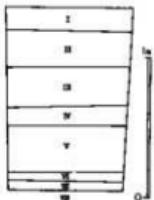


第10図 中棚60-1号地下式横穴出土遺物実測図

8. 永田原遺跡　えびの市大字今西字永田原

川内川とその支流である池島川に挟まれた低位段丘上（標高260m）の遺跡であり、圃場整備事業の予定があるので、昭和60年11月26日～29日に試掘調査を行なった。

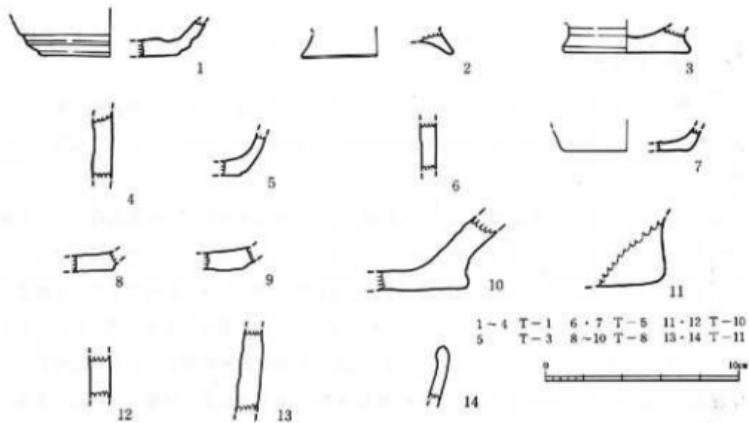
1m×4mのトレンチを11本入れた結果、T-1の最下層の水田と推定される面から高台付碗が出土した。時期的には10世紀前半（平安時代中期）頃に比定される。T-2・3・4・5・10でも水田と推定される層が確認されたが、遺物から中世期の水田と推定される。T-6・12からビットが検出されたが、時期は不明である。



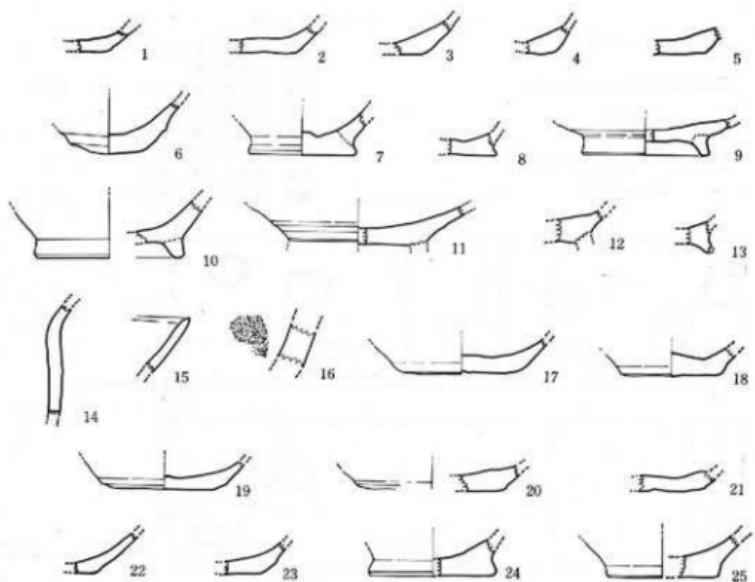
I層	褐色土層
II層	褐色土層（砾石・砂利混り）
III層	茶褐色土層（赤ホヤを多く含む。砂利・マンガンを含む）
IV層	暗褐色土層（赤ホヤ若干含む。砂利混り）
V層	茶褐色土層（マンガンを含む）
VI層	黒褐色土層（マンガンを含む）
VII層	茶褐色土層（マンガンを含む）
VIII層	白色土層（シラス）



第11図 永田原遺跡及び法光寺跡周辺の地形図



第12図 永田原遺跡出土遺物実測図



第13図 法光寺跡出土遺物実測図 (I)

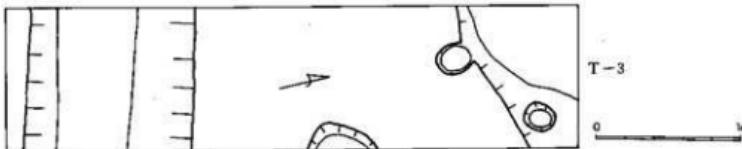
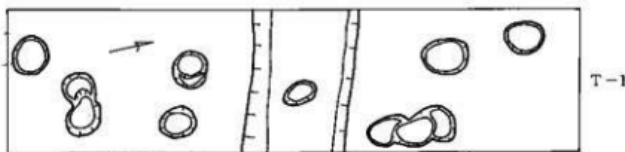
1~16 T-1
17~25 T-2

7. 法光寺跡

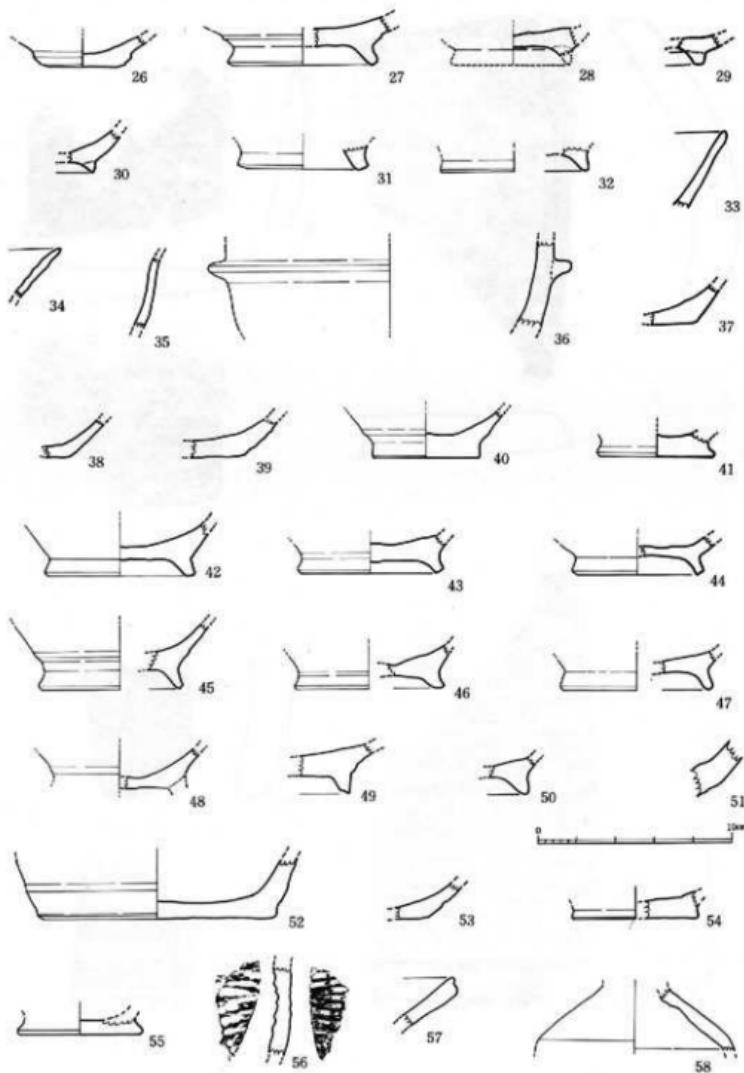
川内川とその支流である池島川に挟まれた低位段丘上（標高260m）の遺跡で、布目瓦が表採されていた。圃場整備事業の予定があるので、昭和60年12月3日～6日に試掘調査を行なった。

1m×4mのトレンチを東西方向に20m間隔、南北方向に30m間隔で6本入れた。その結果、T-1・2・3から柱穴群が検出され、T-1・3からは東西方向に走る溝も検出された。T-1の溝は幅約70cm、深さ32cm、T-2の溝は幅120cm、深さ47cmである。土師器の壺は、底部と体部の境が明瞭なタイプ、底部が斜め下方へ強く張り出すタイプ、高台を有するタイプに分かれる。平瓦は凸面に繩目叩きを施し、凹面に比較的細かい布目模を残す。60は焼成は堅致で須恵質であるが、それ以外は軟質である。布目瓦は高台付焼・ヘラ切り底壺との共伴によって10世紀前半（平安時代中期）に比定される。遺構の性格が寺院跡か駅・役所跡なのかは試掘調査のために把握できなかった。今後の調査に期待する所が大である。

T-1セクション図

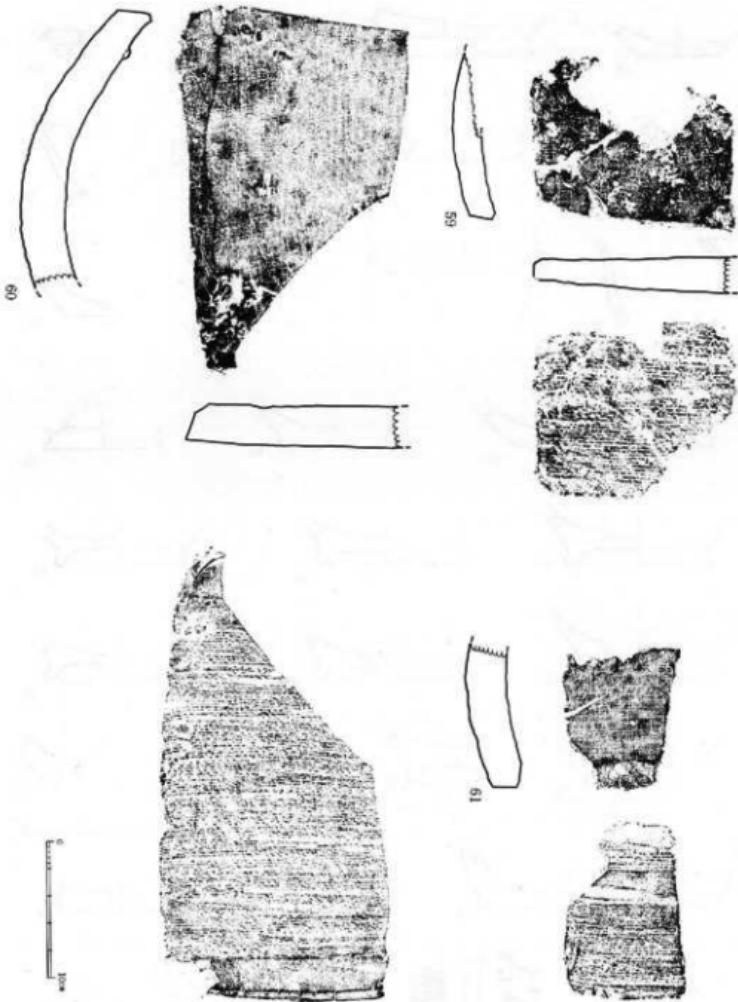


第14図 法光寺跡試掘トレンチ実測図



第15図 法光寺跡出土遺物実測図 (II)

26~36・56 T-2
 37~52・57 T-3
 53~55 T-4
 56~58 須恵器

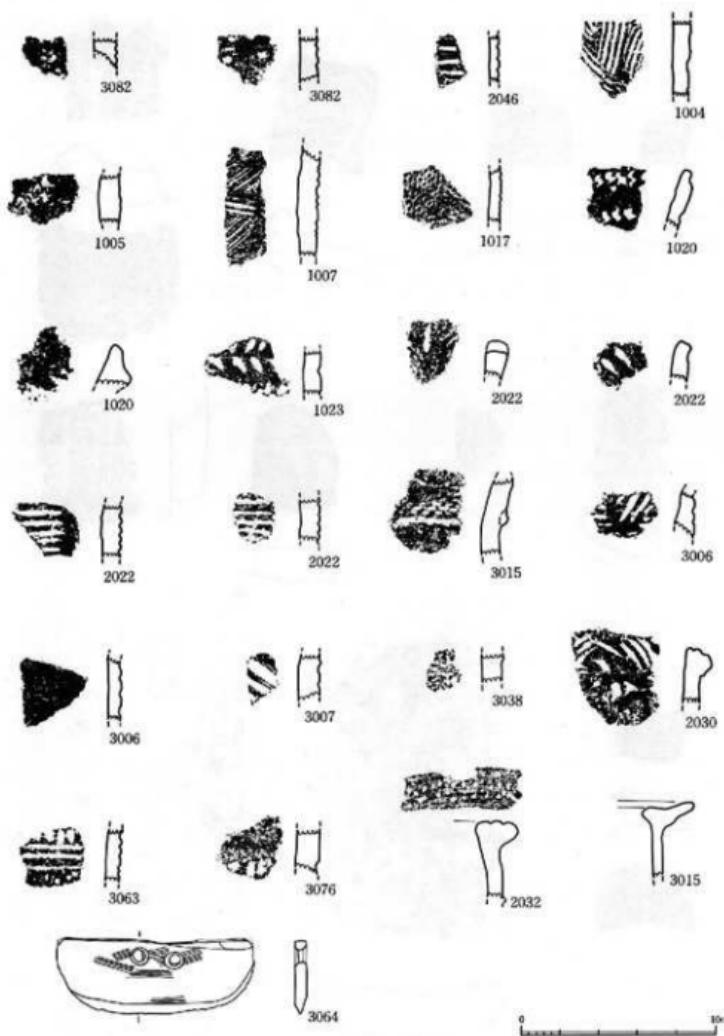


59~61 T-1

第16図 法光寺跡出土遺物実測図 (III)



第17図 法光寺跡出土遺物実測図 (IV)



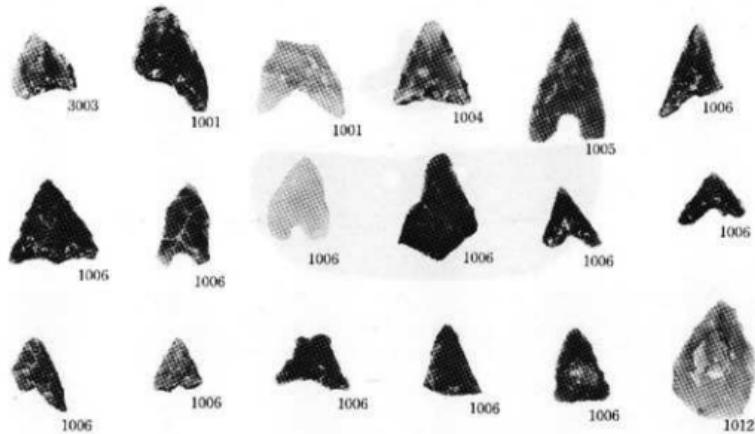
第18図 遺跡詳細分布調査主要遺物実測図

IV えびの市関連文献目録

1. 平部嶽南 「日向地誌」 1883
2. 喜田貞吉 「日向国史」 上巻 1929
3. 宮崎県 「日向の伝説と史蹟」 1929
4. 濑之口伝九郎 「真幸村役場調査所」 1935
5. 上代日向研究所 「日向上代遺跡遺物地名表」 1944
6. 宮崎県 「日向古墳地名表」「日向遺跡調査報告書」 第1輯 1952
7. 石川恒太郎 「日向に於ける横穴古墳及地下式古墳とその分布に就て」『日向史学』 第1卷第3号 1953
8. 東京国立博物館 「東京国立博物館収蔵品目録」 1956
9. 田中熊雄 「宮崎県 繩文・弥生期考古遺物地名録」「宮崎県文化財調査報告書」 第2輯 1957
10. 鈴木重治 「資料解説 宮崎県内の縄文土器について」『宮崎県博物館報』 第5号 1959
11. 文化庁 「全国遺跡地図 宮崎県」 1962
12. 大牟田均 「加久藤町郷土誌」 1965
13. 中間俊範 「飯野町郷土史」 1966
14. 石川恒太郎 「飯野町大字上江字小木原の地下式古墳調査」「宮崎県文化財調査報告書」 第11輯 1966
15. 栗原文藏 「えびの市真幸・島之内地下式横穴」「宮崎県文化財調査報告書」 第12輯 1967
16. 石川恒太郎 「宮崎県の考古学」 1968
17. 石川恒太郎 「えびの町平松の地下式古墳調査報告」「宮崎県文化財調査報告書」 第14集 1969
18. 石川恒太郎 「えびの町小木原地下式古墳調査報告」「宮崎県文化財調査報告書」 第15集 1970
19. 石川恒太郎 「えびの市島之内地下式古墳調査報告」「宮崎県文化財調査報告書」 第16集 1971
20. 木崎原操 「小木原古墳群調査報告(第2報)」「えびの」 第2号 1971
21. 石川恒太郎 「小木原遺跡」「九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告」(1) 1972

22. 日高正晴 「小木原古墳・地下式A号墳」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告』(1)
1972
23. 木崎原 操「高速自動車道路敷地内の遺跡調査について」『えびの』 第4号 1972
24. 石川恒太郎 「久見迫・馬頭遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告』(1) 1972
25. 石川恒太郎 「灰塚遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告』(2) 1973
26. 木崎原 操「小木原古墳群調査報告(第5報)」『えびの』 第5号 1973
27. 石川恒太郎 「地下式古墳の研究」 1973
28. 田中 茂 「えびの市小木原地下式横穴3号出土品について」『宮崎県総合博物館研究紀要』2 1974
29. 木崎原 操「小木原古墳群調査報告(第6報)」『えびの』 第7号 1974
30. 木崎原 操「小木原古墳群調査報告(第7報)」『えびの』 第8号 1975
31. 田中 茂 「宮崎県の現況」『九州考古学』51 1976
32. 文化庁 『全国遺跡地図 宮崎県』 1977
33. 岩永哲夫 「平松地下式古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第20集 1978
34. 石川恒太郎 「増補 地下式古墳の研究」 1979
35. 藤岡謙二郎 「日向国」『古代日本の交通路』IV 1979
36. 石川恒太郎・遠藤尚・北郷泰道 「前畠遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告』(3) 1979
37. 北郷泰道・岩永哲夫 「平松地下式古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第22集
1980
38. 本村豪章 「古墳時代の基礎研究稿—資料篇(1)」『東京国立博物館紀要』 第16号 1981
39. 宮崎県総合博物館 『宮崎県総合博物館 館蔵品目録』 1982
40. 西山茂裕 「石器時代のえびの」『えびの』 第18号 1985
41. 宮崎県教育委員会 『宮崎県の文化財』 1982
42. 宮崎県教育委員会 『九州縦貫自動車道遺跡分布調査報告書』 1969

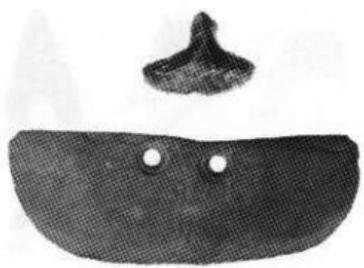
図 版



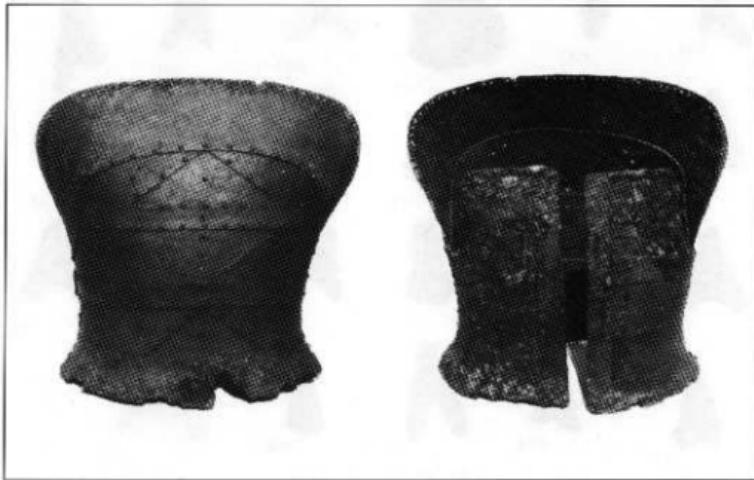
打製石錐 (I)



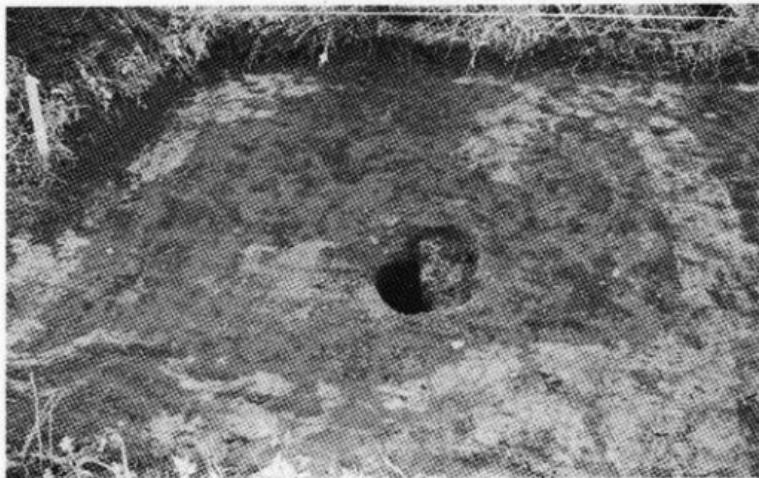
打製石錐 (II)



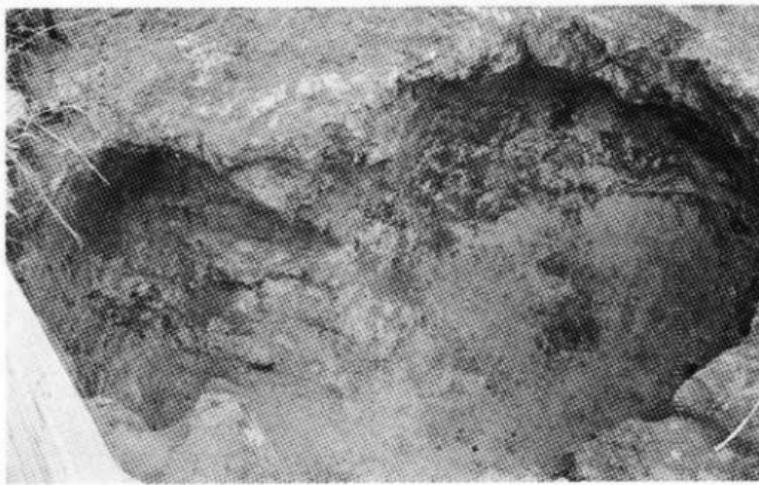
石匙（中須遺跡）・石磨丁（田原陣遺跡）



短甲（小木原3号地下式横穴墓）

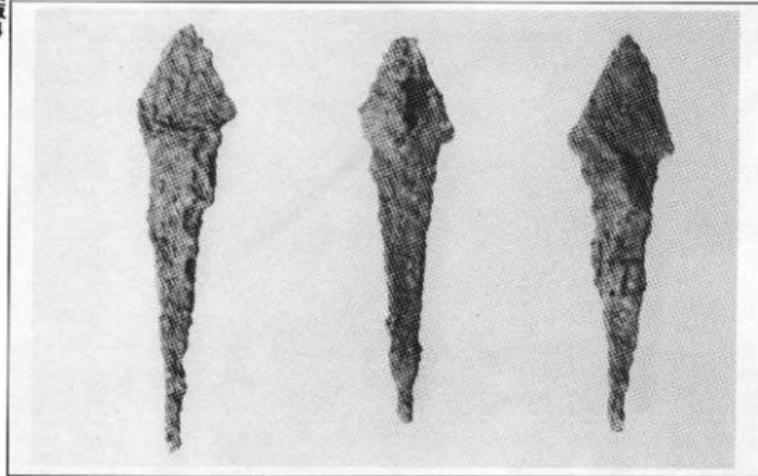


中標60-1號地下式橫穴墓檢出狀況



中標60-1號地下式橫穴墓全景

圖版
4



中棚60-1号地下式横穴墓出土鐵鎌



永田原遺跡全景



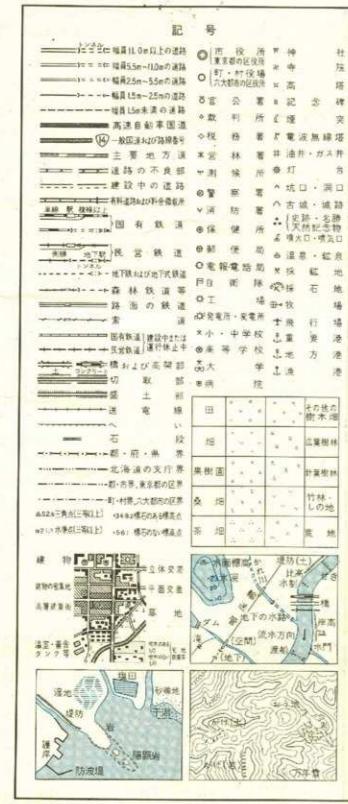
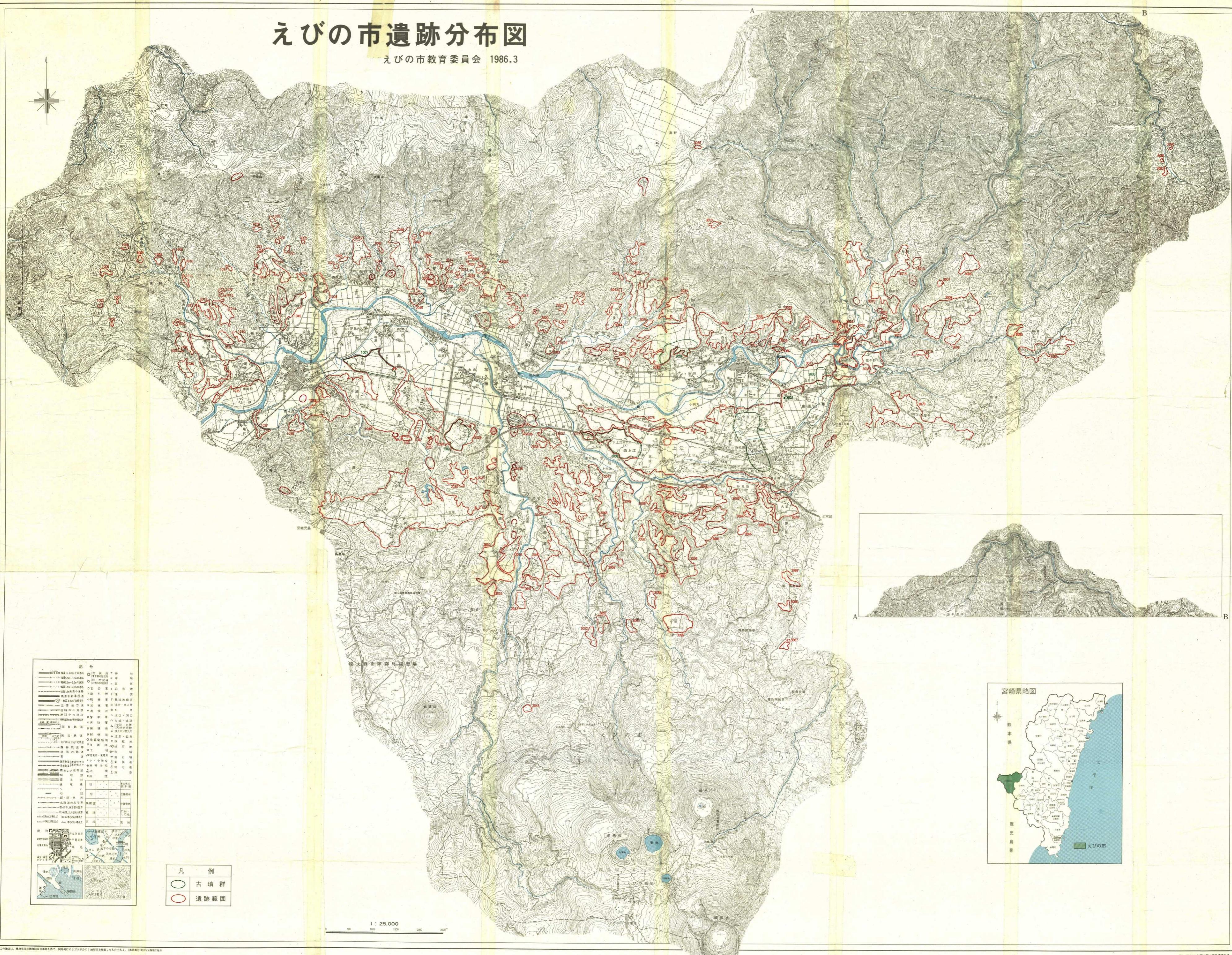
法光寺 T-3 全景



法光寺 T-1 遺物出土狀態

えびの市遺跡分布図

えびの市教育委員会 1986.



凡例	
○	古墳群
○	遺跡範囲

I : 25,000



えびの市遺跡詳細分布調査報告書

昭和61年3月31日

編集・発行

宮崎県えびの市教育委員会
宮崎県えびの市大字大明司2146-2

印 刷 富士マイクロ株式会社